

## 第5章

# 『シュリーマド・バーガヴァタム』について ヴァーサデーヴァに授けられたナーラダの教え

### 第1節

#### सूत उवाच

अथ तं सुखमासीन उपासीनं बृहच्छ्रव्वाः ।  
देवर्षिः प्राह विप्रर्षिं वीणापाणिः स्मयन्निव ॥ १ ॥

スータ ウヴァーチャ  
*sūta uvāca*

アタハ タンム スカハンム アーシーナ  
*atha taṁ sukham āsīna*

ウパーシーナンム プリハチ・チラヴァーハ  
*upāsīnam bṛhat-śravāḥ*

デーヴァルシヒ プラーハ ヴィप्रラルシンム  
*devarṣiḥ prāha viprarṣim*

ヴィーナー・パーニヒ スマヤン- イヴァ  
*vīṇā-pāṇiḥ smayan iva*

*sūtaḥ*—スータ; *uvāca*—言った; *atha*—ゆえに; *taṁ*—かれに; *sukham āsīnaḥ*—ゆったりと座って; *upāsīnam*—近くに座っている者に向かって; *bṛhat-śravāḥ*—深い敬意を表して; *devarṣiḥ*—神々の中の偉大なリシ; *prāha*—言った; *viprarṣim*—ブラーフマナ達の中のリシに向かって; *vīṇā-pāṇiḥ*—手にヴィーナーを持っている者; *smayan iva*—微笑んでいるように見える。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「神々のなかの聖者（ナーラダ）は、笑みを浮かべつつゆったりと座り、ブラーフマナのなかのリシ（ヴァーサデーヴァ）に話しかけた。」

### 要旨解説

ナーラダは微笑んでいました。大聖者ヴァーサデーヴァの失望の理由をよく知っていたから

です。これからナーラダが徐々に説明していくように、その失望感は、献愛奉仕について十分に説明されなかったことに起因しています。ナーラダはその欠陥を知っていましたし、それはヴァーサデーヴァの心境を見ても明白なことでした。

## 第2節

नारद उवाच

पाराशर्य महाभाग भवतः कच्चिदात्मना ।  
परितुष्यति शरीर आत्मा मानस एव वा ॥ २ ॥

ナーラダ ウヴァーチャ  
*nārada uvāca*

पारラーशर्या माहा・बाहाग  
*pārāśarya mahā-bhāga*

バハヴァタハ カッチドウ आトウマナー  
*bhavataḥ kaccid ātmanā*

パリトウツシャティ シャーリーラ  
*parituṣyati śārīra*

アトウマー マーナサ エーヴァ ヴァー  
*ātmā mānasa eva vā*

*nāradaḥ*—ナーラダ; *uvāca*—言った; *pārāśarya*—パラージャラの子よ; *mahā-bhāga*—このうえなく幸運な者; *bhavataḥ*—あなたの; *kaccit*—もしそうならば; *ātmanā*—~の自己の悟りによって; *parituṣyati*—それが満足させるか; *śārīraḥ*—体を自分と思う; *ātmā*—自己; *mānasaḥ*—心を自分と思う; *eva*—確かに; *vā*—そして。

パラージャラの子・ヴァーサデーヴァにナーラダが尋ねた。「あなたは、体や心を自己の悟りの対象にして満足しているのか」

## 要旨解説

ナーラダはこう話しかけて、ヴァーサデーヴァの失望の原因をほのめかしています。強靱な精神力を持つパラージャラの子孫であるヴァーサデーヴァには、失望感を起こさせるはずのないすぐれた血統を受けつぐ特権にめぐまれていたはずでした。偉大な父に生まれた偉大な子息だったので、体と心を自分とみなすべきではありませんでした。知識に欠ける凡人なら体

や心を自分と思いこむかもしれませんが、ヴァーサデーヴァはそのようなまちがいをおかすべきではありませんでした。物質的な体や心を超越した自己の悟りの境地にいないければ、快活な性格にはなれません。

### 第3節

जिज्ञासितं सुसम्पन्नमपि ते महदद्भुतम् ।  
कृतवान् भारतं यस्त्वं सर्वार्थपरिबृंहितम् ॥ ३ ॥

ジギヤーシタンム スサンパンナンム  
*jijñāsitaṁ susaṁpannam*

アピ テー マハドゥ・アドゥブフタンム  
*api te mahad-adbhutam*

クリタヴァーン バハーラタンム ヤス トウヴァンム  
*kṛtavān bhārataṁ yas tvam*

サルヴァールタハ・パリブリンムヒタンム  
*sarvārtha-paribr̥hitaṁ*

*jijñāsitaṁ*—十分に問いただしている; *susaṁpannam*—よく精通して; *api*—にもかかわらず; *te*—あなたの; *mahad-adbhutam*—偉大ですばらしい; *kṛtavān*—準備した; *bhārataṁ*—『マハーバーラタ』; *yaḥ tvam*—あなたが為したこと; *sarva-artha*—すべての配列を含んでいる; *paribr̥hitaṁ*—詳細に説明されて。

あなたが万全の質問を用意し、研究も首尾良く完結させ、いっさいのヴェーダの教えを入念に網羅した『マハーバーラタ』という偉大かつ驚嘆すべき書籍を著わしたことに、疑いの余地はない。

### 要旨解説

ヴァーサデーヴァの失望が知識不足によるものでないことは明らかです。学習者の立場からヴェーダ経典について万全の質問を準備し、その結果としてヴェーダに関するすべての説明を網羅した『マハーバーラタ』が作られたのです。

#### 第4節

जिज्ञासितमधीतं च ब्रह्मयत्तत् सनातनम् ।  
तथापि शोचस्यात्मानमकृतार्थ इव प्रभो ॥ ४ ॥

ジギヤーシタンム アデヒーターナム チャ  
*jijñāsitam adhītaṁ ca*

ブラフマ ヤトウ タトウ サナータナム  
*brahma yat tat sanātanam*

タタハーピ ショーチャッシ アートウマーナム  
*tathāpi śocasy ātmānam*

アクリタールタハ イヴァ プラボホー  
*akṛtārtha iva prabho*

*jijñāsitam*—巧みに、十分に描写している; *adhītam*—得られる知識; *ca*—そして; *brahma*—絶対者; *yat*—であるもの; *tat*—それ; *sanātanam*—永遠な; *tathāpi*—それにもかかわらず; *śocasi*—嘆いている; *ātmānam*—自己に対して; *akṛta-arthaḥ*—なにもしていない; *iva*—のような; *prabho*—プラブよ。

あなたは非人格のブラフマンについて、そしてその悟りから得られる知識について十分に描写している。ところがヴァーサ・プラブよ。このような数々の偉業にもかかわらず、すべてが徒労に終わったかのように落胆に沈んでいるのは、なぜか。

#### 要旨解説

シュリー・ヴァーサデーヴァが編纂した『ヴェーダנט・スートラ』、すなわち『ブラフマ・スートラ』には、姿を持たない絶対者の様相について完全に描写されており、世界でもっとも深遠な解説書として認められています。永遠性に関する記述が網羅され、その方法もきわめて学術的です。ですから、ヴァーサデーヴァの崇高な学識に疑いをはさむ余地はありません。では、なぜかれは失意の底にあったのでしょうか。

#### 第5節

व्यास उवाच

अस्त्येव मे सर्वमिदं त्वयोक्तं

तथापि नात्मा परितुष्यते मे ।  
तन्मूलमव्यक्तमगाधबोधं  
पृच्छामहे त्वात्मभवात्मभूतम् ॥ ५ ॥

व्यासा उवाच  
*vyāsa uvāca*

अस्ति एवामे सर्वान् इदं त्वय्योक्तम्  
*asty eva me sarvam idam tvayoktam*

तथापि नात्मा परितुष्यते मे  
*tathāpi nātmā parituṣyate me*

तन्मूलमव्यक्तमगाधबोधम्  
*tan-mūlam avyaktam agādha-bodham*

पृच्छामहे त्वात्मभवात्मभूतम्  
*ṛcchāmahe tvātma-bhavātma-bhūtam*

*vyāsaḥ*— व्यासा; *uvāca*— 言った; *asti*— ~がある; *eva*— 確かに; *me*— 私のもの; *sarvam*— すべて; *idam*— これ; *tvayā*— あなたによって; *uktam*— 語られた; *tathāpi*— それでも; *na*— ではない; *ātmā*— 自己; *parituṣyate*— なだめる; *me*— 私に; *tat*— ~であるものの; *mūlam*— 根源; *avyaktam*— 見出されていない; *agādha-bodham*— 無限の知識を持つ人物; *ṛcchāmahe*— 尋ねる; *tvā*— あなたに; *ātma-bhava*— 自分で誕生した; *ātma-bhūtam*— 子孫。

シュリー・ヴァサデーヴァが答えた。「私について今述べられたことはまったくそのとおりです。にもかかわらず、私の心は釈然としていないのです。ですから、この不満の真因についてお尋ねします。なぜならあなたは、みずから誕生した（平凡な父母を持たない）人物・ブラフマーのご子息であるゆえに、無尽蔵の知識をそなえておられるからです。

### 要旨解説

物質界に住むすべての人々が、体と心を自分だと思いこんでいます。そのため、この世界に行き渡っている知識はすべて体や心にまつわるものであり、それが落胆の根源になっています。しかし、物質的知識を極めた学者でさえこの事実には気づいていない場合がほとんどです。ですから、ナーラダのような人物にすがって落胆の原因を解明しようとする姿勢は正しいと言えます。なぜナーラダに頼るべきか。その理由がこれから説明されていきます。

## 第6節

स वै भवान् वेद समस्तगुह्य-  
मुपासितो यत्पुरुषः पुराणः ।  
परावरेणो मनसैव विश्वं  
सृजत्यवत्यत्ति गुणैरसृजः ॥ ६ ॥

サ ヴァイ バハヴァーン ヴェーダ サマスタ・グヒヤム  
*sa vai bhavān veda samasta-guhyam*

ウパーシトー ヤトゥ プルシャハ プラーナハ  
*upāsito yat puruṣaḥ purāṇaḥ*

パラヴァレーショー マナサイヴァ ヴィシュヴァンム  
*parāvareṣo manasaiva viśvam*

スリジャティ アヴァティ アッティ グナイル アサンガハ  
*srjaty avaty atti guṇair asaṅgaḥ*

*saḥ*—このように; *vai*—確かに; *bhavān*—あなた自身; *veda*—知っている; *samasta*—すべてを含んでいる; *guhyam*—秘密の; *upāsitaḥ*—~の献愛者; *yat*—なぜなら; *puruṣaḥ*—人格主神; *purāṇaḥ*—最古の人物; *parāvareṣaḥ*—物質界と精神界の支配者; *manasā*—心; *eva*—だけ; *viśvam*—宇宙; *srjati*—創造する; *avati atti*—破壊する; *guṇaiḥ*—物質によって; *asaṅgaḥ*—執着していない。

師よ！ あなたは神秘なるものすべてをご存知です。物質界を創造し、破壊し、精神界を維持し、そして物質自然の三様式を超越した根源の人格主神を崇拜しておられるからです。

## 要旨解説

全身全霊を傾けて主に奉仕をしている人物はすべての知識の象徴です。完璧な献愛奉仕をしているそのような献愛者は、主の質を授かっているからこそ完璧です。ですから、8種類の完璧な神通力 (*aṣṭa-siddhi*・アシュタ・シッディ) でさえ、その人物の神々しい富に比べれば大した価値はありません。ナーラダのような献愛者は、だれもが手に入れようとしている完璧な霊力を使って驚くべき力を発揮することができます。人格主神に匹敵するわけではありませんが、100パーセント完璧な生命体なのです。

## 第7節

त्वं पर्यटन्नर्क इव त्रिलोकी-  
मन्तश्चरो वायुरिवात्मसाक्षी ।  
परावरे ब्रह्मणि धर्मतो व्रतैः  
स्नातस्य मे न्यूनमलं विचक्ष्व ॥ ७ ॥

トゥヴァンム パリヤタンー アルカ イヴァ トウリ・ローキーンム  
*tvam paryāṭann arka iva tri-lokīm*

アンタシュ・チャロー ヴァーユル イヴァートウマ・サークシー  
*antaś-carō vāyur ivāṭma-sākṣī*

パラヴァレー ブラフマニ ダハルマトー ヴラタイヒ  
*parāvare brahmaṇi dharmato vrataiḥ*

スナータッシャ メー ニューナンム アランム ヴィチャクシュヴァ  
*snātasya me nyūnam alam vicakṣva*

*tvam*—あなた; *paryāṭan*—旅している; *arkaḥ*—太陽; *iva*—のように; *tri-lokīm*—三界; *antaḥ-carāḥ*—誰もの心に入ることができる; *vāyur iva*—遍在する空気ほどの存在; *ātma*—自己を悟った; *sākṣī*—目撃者; *parāvare*—原因と結果に関することにおいて; *brahmaṇi*—絶対者の内に; *dharmataḥ*—規定原則に従って; *vrataiḥ*—誓いにおいて; *snātasya*—～に没頭して; *me*—私のもの; *nyūnam*—不足; *alam*—明確に; *vicakṣva*—探求する。

あなたは、太陽のように三界のどこにでも行くことができ、空気のようにすべての生命体の内なる心に入ることができます。ですから、遍在する至高の魂ともいべきお方です。ですから、どうかご教示ください、規定原則と誓いを守りつつ超越的境地に没頭していたにもかかわらず、なぜ私に不足が生じてしまったのかを。

## 要旨解説

超越的な悟り・敬虔なおこない・神像崇拜・慈善・慈悲深さ・非暴力・厳格な規定原則にもとづく経典の研究は、精神生活にとっていつでも有益です。

## 第8節

श्रीनारद उवाच

भवतानुदितप्रायं यशो भगवतोऽमलम् ।  
येनैवासौ न तुष्येत मन्ये तद्दर्शनं खिलम् ॥ ८ ॥

シュリー・ナーラダ ウヴァーチャ  
*śrī-nārada uvāca*

バハヴァターヌディタ・プラーヤム  
*bhavatānudita-prāyam*

ヤシヨー バハガヴァトー マランム  
*yaśo bhagavato 'malam*

イエーナイヴァーサウ ナ トウツシェータ  
*yenaivāsau na tuṣyeta*

マニエー タドウ ダルシャナン キヒランム  
*manye tad darśanam khilam*

*śrī-nāradaḥ*—シュリー・ナーラダ; *uvāca*—言った; *bhavatā*—あなたによって; *anudita-prāyam*—ほとんど讃えられていない; *yaśaḥ*—栄光; *bhagavataḥ*—人格主神の; *amalam*—無垢な; *yena*—それによって; *eva*—確かに; *asau*—かれ (人格主神); *na*—しない; *tuṣyeta*—喜ぶ; *manye*—私は考える; *tat*—その; *darśanam*—哲学; *khilam*—劣っている。

シュリー・ナーラダが言う。「あなたは、人格主神の崇高かつ無垢な栄光をほんとうに世に広めていない。主の超越的な感覚を満足させない哲学に価値はない」

### 要旨解説

至高の魂である人格主神と個々の魂の永遠な絆は、永遠な主人と永遠な召使いの関係に置きかえられます。主は、愛情のこもった奉仕を受けるためにみずからを無数の生命体に分身させました。ですから、主と生命体が満足できるのは両者が交わす愛情だけです。学者ヴァーサデーヴァは根源のヴェーダを数多くのヴェーダ經典に編纂し、ヴェーダーンタ哲学として完結させたのですが、そのどれをとっても人格主神を直接に讃えてはいません。絶対者に関する超越的な主題についてむなしい哲学的思索をかさねても、主の栄光を直接語らなければ聞く者の心を惹きつけることはできません。「人格主神」は超越的な悟りにおける最終段階の言葉です。姿や形のないブラフマンの悟りと局所的存在のパラマートマーの悟りは、栄光に満ちた主を至高の人物として悟る境地ほどの超越的な至福は与えてくれません。

『ヴェーダーンタ・スートラ』の編纂者はヴァーサデーヴァ自身ですが、著者でありながら当惑しています。ならば、著者のヴァーサデーヴァが直接述べていない『ヴェーダーンタ・スートラ』を読者や聴衆者が聞いて、はたして超越的な喜びを感じることができるのでしょうか。だからこそ、著者自身による『ヴェーダーンタ・スートラ』の説明を、『シュリーマド・バーガヴァタム』という形で説明する必要が生じるのです。



## 第9節

यथा धर्मादयश्चार्था मुनिवर्यानुकीर्तिताः ।  
न तथा वासुदेवस्य महिमा ह्यनुवर्णितः ॥ ९ ॥

ヤタハー ダハルマーダヤシュ チャールタハ  
*yathā dharmādayaś cārthā*

ムニ・ヴァリヤーヌキールティターハ  
*muni-varyānukīrtitāḥ*

ナ タタハー ヴァースデーヴァッシャ  
*na tathā vāsudevasya*

マヒマー ヒ アヌヴァルニタハ  
*mahimā hy anuvarṇitāḥ*

*yathā*—〜と同じ程度; *dharmādayaś*—宗教的振舞いに関する4つの全原則; *ca*—そして; *arthāḥ*—目的; *muni-varya*—偉大な聖者、あなた自身; *anukīrtitāḥ*—繰り返して述べて; *na*—ではない; *tathā*—そのように; *vāsudevasya*—人格主神、シュリー・クリシュナの; *mahimā*—栄光; *hi*—確かに; *anuvarṇitāḥ*—そのように絶えず述べて。

偉大なる聖者よ。あなたは宗教上の活動から4つの原則まで、広範囲に記述してはいるものの、至高人格者・ヴァースデーヴァの栄光については述べていない。

### 要旨解説

シュリー・ナーラダからの機敏な診断が、即座に打ちだされました。ヴァーサデーヴァの落胆の根本原因は、さまざまなプラーナを著してはいるものの、主の栄光について述べることを意図的に避けていた点にあります。確かに、そして当然ヴァーサデーヴァは主（シュリー・クリシュナ）の栄光について説明はしていますが、宗教、経済発展、感覚満足、解放などに対する説明に比べると、十分な量ではありません。この4つの原則は、主への献愛奉仕の活動に比べればはるかに劣っています。権威ある学者であるシュリー・ヴァーサデーヴァにもこの違いはわかっていたはずですが。にもかかわらず、主への献愛奉仕というよりすばらしい活動について重点を置くことなく、妥当とは言えない物事のために貴重な時間を費やしてしまいました。失望の原因はここにあります。このことから「主に献愛奉仕をしなければ、心の底から満たされることはない」ということがわかります。『バガヴァッド・ギーター』でもこの事実について明確に述べられています。

宗教を始めとする4つの原則の最後になる解放の境地に到達した人は、純粋な献愛奉仕をするようになります。これが自己の悟り、すなわちブラフマ・ブータ (*brahma-bhūta*) と呼ばれる段階です (『シュリーマド・バーガヴァタム』第4編・第30章・第20節)。ブラフマ・ブータの境地に達した人は心が満たされます。しかしその満足は、崇高な至福の始まりにすぎません。相対的なこの物質界で、私たちは中立で平等な心になって前進しなくてはなりません。この安定した境地を通過したあとに、主への超越的な愛情奉仕に立脚できるようになります。これが、『バガヴァッド・ギーター』で説かれている人格主神の教えです。結論として、ナーラダはヴァーサデーヴァに対し、「ブラフマ・ブータの境地を維持し、超越的な悟りをさらに高めるために、献愛奉仕の道について熱意をこめて繰り返して説明すべきである」と勧めました。そうすることで、かれは深い落胆から解放されるのです。

## 第10節

न यद्वचश्चित्रपदं हरैर्यशो  
जगत्पवित्रं प्रगृणीत कर्हिचित् ।  
तद्वायसं तीर्थमुशन्ति मानसा  
न यत्र हंसा निरमन्त्युशिक्षयाः ॥ १० ॥

ナ ヤドゥ ヴァチャシュ チトウラ・パダナム ハレール ヤシヨー  
*na yad vacaś citra-padam harer yaśo*

ジャガトウ・パヴィトウランム プラグリニータ カルヒチトウ  
*jagat-pavitram pragṛṇīta karhicit*

タドゥ ヴァーヤサンム ティールタハンム ウシャンティ マーナサー  
*tad vāyasam tīrtham uśanti mānasā*

ナ ヤトウラ ハンムサー ニラマンティ ウシク・クシャヤーハ  
*na yatra haṁsā niramanty uśik-kṣayāḥ*

*na*—ではない; *yat*—それ; *vacaḥ*—用語; *citra-padam*—装飾的な; *hareḥ*—主の; *yaśaḥ*—栄光; *jagat*—宇宙; *pavitram*—浄化されて; *pragṛṇīta*—説明された; *karhicit*—ほとんどない; *tat*—それ; *vāyasam*—カラス; *tīrtham*—巡礼の場所; *uśanti*—考える; *mānasāḥ*—神聖な人物達; *na*—ではない; *yatra*—場所; *haṁsāḥ*—あらゆる面で完璧な生物達; *niramanti*—喜びを感じる; *uśik-kṣayāḥ*—超越的な住居に住む人々。

全宇宙を清める唯一の御方である主を讃えていない言葉は、カラスが群がる巡礼地にすぎな

い、と神聖な人物たちは考える。すべてにおいて完璧なかれらは崇高な世界に住んでいるため、そのような言葉になんら喜びを見いだすことはない。

### 要旨解説

カラスと白鳥の心境はそれぞれ異なっており、同類の鳥とは言えません。結果にこだわって働く労働者や激性の人々はカラスに、すべてにおいて完璧な人々は白鳥にたとえられます。カラスはゴミ捨て場に群がるものですが、それは激情に駆られた果報的活動者が、酒や女性、あるいは下品な感覚を楽しむ場所に喜びを感じるのと同じです。白鳥はカラスたちの会議や集会に出ても喜びは感じません。透きとおった水、そして自然な美しさを見せる色とりどりの蓮華の花で優雅に飾られているような、自然な美しい景観が広がる場所に姿を見せる鳥です。同じ鳥でも、白鳥とカラスはこれほどかけ離れているのです。

自然界はさまざまな生物たちに多様な心理を作り出すものであり、そのような生物たちを一緒くたに考えることはできません。

同じことが書物にも当てはまり、人々の心理に応じた多種多様な書物があります。ほとんどの場合、カラスもどきの人々を引きつける市場の本は、捨てられたゴミくず同然の「感覚を魅了する話題」で埋めつくされています。扱われているのは、肉体と希薄な心にまつわるありきたりの話題ばかりで、美辞麗句を駆使して通俗な比喩や隠喩を盛りこんでいるにすぎません。しかし、言葉のかぎりをどれほどつくしていても、どこにも主を讃える言葉は見つかりません。そのような詩や散文は、どのような主題を取りあげようとも、死体を飾るだけの文章にすぎません。白鳥にたとえられる気高い人々は、精神的には死んだも同然の人間が喜ぶような書物を読んでも喜びは感じません。激性や無知に包まれたこのような書物は、種々雑多な諷刺文句で巷に出まわっていますが、私たちの精神的な望みに応えてくれることはありませんし、白鳥のような精神的に高貴な人々は、そのような書物にはかかわりません。気高い人々はマナーサ (mānasa) と呼ばれますが、それはかれらが気高い境地で自発的に主に崇高な奉仕を捧げているからです。この奉仕には、感覚満足や物質的自我の心からくる巧妙な推論が入る余地はありません。

世の文学者、科学者、凡俗詩人、観念的哲学者、政治家など、感覚を喜ばせる物質的な発達に没頭している人々はすべて、物質エネルギーに動かされている操り人形にすぎません。無価値な話題の処分場に群がって喜びを感じている人々なのです。スヴァーミー・シュリーダラは、それを「売春婦を物色する者たちの喜び」と呼んでいます。

しかし、主の栄光をつづる書物は、人類の活動の根本を理解しているパラマハンサたちによって楽しまれています。

## 第 1 1 節

तद्गविसर्गो जनताघविप्रुवो  
यस्मिन् प्रतिश्लोकमबद्धवत्यपि ।  
नामान्यनन्तस्य यशोऽङ्कितानि यत्  
शृण्वन्ति गायन्ति गृणन्ति साधवः ॥ ११ ॥

タドゥ・ヴァーグ・ヴィサルゴー ジャナターガハ・ヴィプラヴォー  
*tad-vāg-visargo janatāgha-viplavo*

ヤスミン プラティ・シュローカンム アバッドハヴァティ アピ  
*yasmin prati-ślokaṃ abaddhavyaty api*

ナーマーニ アナンタツシャ ヤショー न्किताーनि यत्  
*nāmāni anantasya yaśo 'nkitāni yat*

シュリンヴァンティ ガーヤンティ グリナンティ サーダハヴァハ  
*śṛṇvanti gāyanti grṇanti sādhaḥ*

*tat*—それ; *vāk*—語彙; *visargaḥ*—創造; *janatā*—一般大衆; *agha*—罪; *viplavaḥ*—革命的な; *yasmin*—その中に; *prati-ślokaṃ*—それぞれの節; *abaddhavyaty*—不規則に構成されている; *api*—にもかかわらず; *nāmāni*—超越的な名前など; *anantasya*—無限の主の; *yaśaḥ*—栄光; *ankitāni*—描写されている; *yat*—であるもの; *śṛṇvanti*—聞く; *gāyanti*—歌う; *grṇanti*—受け入れる; *sādhaḥ*—正直で清らかな心の持ち主。

いっぽう、無限なる至高主の名前、名声、姿、神聖な娯楽などを満載した文献は別次元の存在であり、間違った文化という不敬な生活に革命をもたらす崇高な言葉にあふれている。そのような聖なる文献は、たとえ不完全な部分があるとしても、まったく正直な心を持つ無垢な人々によって聞かれ、歌われ、受けいられる。

## 要旨解説

偉大な思想家は、最悪なものから最善なものを引き出す特技をそなえています。知的な人物は、毒から甘露を取りだし、不潔な場所から金を見つけだし、素性の卑しい家族から良妻をめとり、最下等の家族出身の教師や人からでもすぐれた教えを受け入れるものである、と言われています。これは、どこのだれにでも例外なく当てはまる道徳律です。しかし、聖者は一般人の基準をはるかに超えた境地にいます。聖者はいつも至高主を讃えることに没頭していますが、それは、至高主の名前や名声を広めることでけがれた世界が清められ、『シュリーマド・バー

ガヴァタム』のような超越的文献を世に届けることで人々が健全に生きるようになるからです。この要旨解説を書いているとき、インドは重大な問題に直面していました。隣国で友好国の中国がインド国境を攻撃したのです。私たちヴァイシュナヴァは政治にかかわることはありませんが、昔から中国とインドは、敵対することなく何世紀も友好関係を保っていました。それは、両国がそのような関係にあったときには世界中が神の意識に包まれていたからであり、どの国でも神を恐れ、無垢な心を持ち、質素な生活がいとなまれていたため、政治的策略をめぐらす必要はなかったからです。居住に適さない地区をめぐって中国とインドが争うわけがなく、もちろん、この問題で戦争の発端になるような出来事はありませんでした。しかし、私たちが危惧しているカリという争いの時代の影響で、ささいな刺激でいつでも争いが誘発される可能性が潜んでいます。これは、今回の問題が直接の原因ではなく、現代のけがれた世相が原因です。つまり、至高主の名前と名声を讃えることを止めようとする特定のグループによる工作活動が組織的になされている、ということです。だからこそ、『シュリーマド・バーガヴァタム』のメッセージを全世界に流布させる必要性があるのです。インドで責任ある立場にある人々すべての義務は、待ち望まれている平和を全世界にもたらし、至上の福利を世界に提供するために『シュリーマド・バーガヴァタム』の崇高なメッセージを広めることにあります。インドがこの責任ある仕事をおろそかにして義務を遂行していないために、全世界におおくの争いと問題が蔓延しています。私は確信しています、『シュリーマド・バーガヴァタム』の崇高な教えが世界の指導者たちに受けいれられさえすれば、まちがいなくかれらの心は変化し、民衆も自然にそのような指導者に従うようになるということを。大衆は、現代政治家や民間指導者の掌中にある道具とも言えます。その指導者たちの心に変化が起これば、世界の雰囲気にも劇的な変化が生じるはずですが、また私は承知しています、人々の神の意識をよみがえらせ、世界の雰囲気をふたたび精神的に変えるこの超越的な言葉を世に広める誠実な試みには、幾多の困難がともなっていることを。適切な言語を使って、特に外国語でこの哲学を世に知らしめようとする私の試みは失敗するおそれが多分にあり、正しく表現しようとする誠実な試みではあっても、文法的なまちがいも多々あることでしょう。しかしそれでも確信しています、たとえその試みに欠陥があっても、私が伝えんとすることの重大さが考慮され、全能の神を讃える誠実な試みをやがて読者たちが認めてくれるはずだ、ということ。自分の家が火事になった人は、外に飛びだして近所の人たちに助けを求めますが、その隣人が外国人だったとしても、そしてたとえ通じない言葉で説明したとしても、相手は緊迫した状況を理解してくれることでしょう。『シュリーマド・バーガヴァタム』の崇高なメッセージをけがれたこの世界に広めることにも、同じ協調精神が必要です。結局、主題は精神的価値にかかわる専門的科学的な科学ですから、たいせつな

ことは言語ではなく手段です。この偉大な書物が説く手段が世界の人々に理解されれば、成功をおさめることができます。

全世界の大衆が物質的なものごとくに没頭しすぎれば、ささいなことで個人が別の個人を、国家が別の国家を攻撃するのは当然です。それが、カリという争いの時代の法則なのですから。世界はすでに名状しがたい墮落のきわみに達しており、それは周知の事実です。感覚を満たす物質的な考えを詰めこんだ無益な本が世にあふれており、多くの国では猥褻な本を検閲する国営の組織があります。これは、政府や公共の指導者たちはこのような本を望んでいないのに、国民が感覚満足を求めているから市場に出まわっていることを如実にしめています。大衆はなにかを読みたいと望むのですが（それは自然な欲求ですが）、心がけがれているために俗な本を求めています。そのような状況で、『シュリーマド・バーガヴァタム』のような超越的文献は、けがれた心を持つ大衆の活動を減らすだけでなく、おもしろい本を読もうとするかれらの欲求を満たす食糧になってくれます。読みだしてすぐには楽しめないかもしれませんが、黄疸に苦しむ患者が氷砂糖を食べたがらない状態に似ていますが、それでも氷砂糖だけが黄疸の治療薬だということも忘れてはなりません。同じように、『バガヴァッド・ギーター』と『シュリーマド・バーガヴァタム』の読書を普及させる組織的な運動を推進すれば、感覚満足という黄疸症状を治療する氷砂糖の役目を担ってくれるはずで、この文献に対する味覚を高めれば、社会を毒するだけのほかの書物もおのずと姿を消していくことでしょう。

確かにこの『シュリーマド・バーガヴァタム』には数多くの文章・編集の誤りなどがあるかもしれませんが、やがては社会のすべての人々が迎えてくれることを確信しています。なぜなら、この章に心優しくも登場して下さったシュリー・ナーラダによって勧められている書物だからです。

## 第12節

नैष्कर्म्यमप्यच्युतभाववर्जितं

न शोभते ज्ञानमलं निरञ्जनम् ।

कुतः पुनः शश्वदभद्रमीश्वरे

न चार्पितं कर्म यदप्यकारणम् ॥ १२ ॥

ナイシュカルミヤム アピ アチュタ・バーハヴァ・ヴァルジタム  
naiṣkarmyam apy acyuta-bhāva-varjitaṁ

ナ ショーバハテー ギャーナンム アラム ニランジャナンム  
na śobhate jñānam alaṁ nirañjanam

クタハ プナハ シヤシュヴァドゥ アバハドゥランム イーシュヴァレー  
kutaḥ punaḥ śaśvad abhadram īśvare

ナ チャールピタンム カルマ ヤドゥ アピ アカーランム  
na cārpitaṁ karma yad apy akāraṇam

naiṣkarmyam—自己の悟り、果報的活動の反動に影響されない; api—にもかかわらず; acyuta—完全無欠な主; bhāva—概念; varjitam—～がない; na—しない; śobhate—良く見える; jñānam—超越的知識; alam—やがて; nirañjanam—肩書きに囚われない; kutaḥ—そこに; punaḥ—ふたたび; śaśvat—いつも; abhadram—適さない; īśvare—主に; na—ではない; ca—そして; arpitam—捧げた; karma—果報的活動; yat api—であるもの; akāraṇam—結果を生じない。

自己を悟るための知識は物質的な物事と無縁ではあるが、完全無欠な人物（神）について述べていなければ、さほどすばらしい教えには見えない。ならば、最初から苦痛で空しい果報的活動が主への献愛奉仕に向けられていなければ、その価値のなさは言うにおよばない。

### 要旨解説

この節で言及されているように、主の超越的な栄光を述べていない通俗な本はもちろん、献愛奉仕に関係のないヴェーダ経典や非人格的ブラフマンに対する推論も非難されています。非人格的ブラフマンに関する推論がこの理由で非難されるのですから、献愛奉仕の目的からはずれたありきたりの果報的活動は非難されて当然です。そのような推論的知識や果報的活動（結果にこだわる活動）は、私たちを人生の完成という目標に導いてくれることはありません。あらゆる人々がおこなっている果報的活動は、苦しみに始まり、苦しみに終わります。果報的活動は献愛奉仕に役だってこそ、実りあるものになります。『バガヴァッド・ギーター』でも、活動の結果は主への奉仕に捧げるべきであり、さもなければ行為者を縛りつけるだけであると言われています。活動の結果を受けとる正当な人物は人格主神であり、感覚満足のために行動する人は、耐えがたい困難に直面させられます。

### 第 13 節

अथो महाभाग भवानमोघदुक्  
शुचिश्रवाः सत्यरतो धृत्व्रतः ।  
उरुक्रमस्याखिलबन्धमुक्तये  
समाधिनानुस्मर तद्विचेष्टितम् ॥ १३ ॥

アトホー マハー・バハーガ バハヴァーン アモーガハ・ドウリク  
*atho mahā-bhāga bhavān amogha-dṛk*

シュチ・シュラヴァーハ サチャ・ラトー ドフウリタ・ヴラタハ  
*śuci-śravāḥ satya-rato dhṛta-vrataḥ*

ウルクラマッシャーキヒラ・バンダハ・ムクタイエー  
*urukramasyākhila-bandha-muktaye*

サマーデヒナーヌスマラ タドウ・ヴィチエーシュティタンム  
*samādhinānusmara tad-viceṣṭitam*

*atho*—ゆえに; *mahā-bhāga*—非常に幸運な; *bhavān*—あなた自身; *amogha-dṛk*—完璧に見ることのできる者; *śuci*—無垢な; *śravāḥ*—名高い; *satya-rataḥ*—誠実の誓いをたてている; *dhṛta-vrataḥ*—精神的質に立脚して; *urukramasya*—超自然的なおこないをする者(神)の; *akhila*—普遍的な; *bandha*—束縛; *muktaye*—～からの解放のために; *samādhinā*—法悦境で; *anusmara*—熟考し、それらを説明する; *tad-viceṣṭitam*—主のさまざまな娯楽。

ヴァーサデーヴァよ。あなたは完璧な洞察力を持ち、非のうちどころのない名声にめぐまれている。揺るぎない誓いをたてた真実の人だ。そういうあなただからこそ、大衆があらゆる物質的束縛から救われるよう、法悦境のなかで主の崇高な娯楽を黙想することができる。

### 要旨解説

だれでも読書を楽しむ気持ちを持っています。未知の世界について信頼できる情報源から聞いたり読んだりしたいと思っているのに、その思いは、物質的な感覚を満たす情報だらけの嘆かわしい書物によって食べ物にされています。そのような書物に書かれているのは俗な詩や哲学的思索などで、程度の差こそあれマーヤーに惑わされており、言いたいことは感覚満足です。その正体は、知性に欠ける人たちが興味をいだくような華やかな言葉で飾られている無用の長物です。魅了された人々は、何度も誕生を繰り返しながら、解放の望みもなく物質的束縛にますます絡まっていきます。シュリー・ナーラダ・リシはヴァイシュナヴァの筆頭者の立場から、そのような無価値な書物の犠牲になった不運な人々を哀れみ、魅力的であると同時に束縛からの解放をもたらす崇高な文献を作るようヴァーサデーヴァに助言をしました。シュリーラ・ヴァーサデーヴァやその代表者は、ものごとを正しい視点で捉える訓練を受けているので、道をしめす十分な資質をそなえています。精神的に完成しているために純粋な思考力をそなえ、献愛奉仕に支えられた堅い誓いを持ち、物質界で朽ちはてている墮落した魂を救おうと強く決心している人物たちなのです。さまよえる魂たちは、毎日のように小説などを読みふけてい



ますが、ヴァーサデーヴァやナーラダのような聖者たちは、そのような熱意ある読者に向けて精神界から無限のニュースを発信できます。『バガヴァッド・ギーター』によれば、物質界は全創造界のほんの一部を占めているだけで、地球はその物質界全体の小さな1粒にすぎません。

世界には無数の文学者がいて、大衆の楽しみのために、何千年ものあいだ、数えきれないほどの文学書を作りだしてきました。あいにく、そのどれ一つをとっても地上に平和と平安をもたらしたものはありません。そのなかに精神的な情報が欠けているからであり、だからこそ特に『バガヴァッド・ギーター』と『シュリーマド・バーガヴァタム』というヴェーダ経典が苦しむ人類のために用意されています。人間の活力源を食い物にする物質文化の苦しみからの解放をもたらす文献なのです。『バガヴァッド・ギーター』はヴァーサデーヴァが記録した主自身の教えであり、そして『シュリーマド・バーガヴァタム』はその主クリシュナの活動に関する超越的な描写であり、これらの書物だけでも永遠な平和と苦しみからの解放という人類の悲願をかなえてくれます。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、全宇宙の全生命体がすべての物質的束縛から完全に解放されるために用意されているのです。主の崇高な娯楽をめぐるその超越的記述は、ヴァーサデーヴァのような自由な魂や、主への気高い愛情奉仕に没頭しているヴァーサデーヴァの代表者だけが描写できます。そのような献愛者たちだけに、かれらの献愛奉仕の力ゆえに、主の娯楽とその崇高な質がおのずからしめされます。献愛者でなければ、だれであろうと何年も推論しつづけても、主の行動は理解も説明もできません。『シュリーマド・バーガヴァタム』の説明は正確無比であり、この偉大な書物で5,000年前に予言されたことが、今その言葉どおりになっています。つまり、この著者の視野には過去・現在・未来が含まれているということです。ヴァーサデーヴァのような解放された魂が完璧であるのは、視野と知恵の力だけではなく、聴いて理解する力・思考力・感性・他の感覚活動の力によるものです。解放を達成した人物には完璧な感覚がそなわり、そのような感覚だけをとおして、感覚の所有者フリシーケーシャ、すなわち人格主神シュリー・クリシュナに仕えることができます。だからこそ『シュリーマド・バーガヴァタム』は、ヴェーダの編纂者であるシュリーラ・ヴァーサデーヴァという完璧な人物が著した完全無欠の人格主神に関する完璧な描写と言えるのです。

#### 第14節

ततोऽन्यथा किञ्चन यद्विवक्षतः

पृथग्दुःशस्तत्कृतरूपनामभिः ।

न कर्हिचित्क्वापि च दुःस्थिता मति-

र्लभेत वाताहतनौरिवास्पदम् ॥ १४ ॥

タトー アニヤタハー キンチャナ ヤドゥ ヴィヴァクシャタハ  
*tato 'nyathā kiñcana yad vivakṣataḥ*

ブリタハグ ドウリシャス タトウ・クリタ・ルーパ・ナーマビヒ  
*prthag dṛśas tat-kṛta-rūpa-nāmabhiḥ*

ナ カルヒチトウ クヴァーピ チャ ドウフスティター マティル  
*na karhicit kvāpi ca duḥsthitā matir*

ラベヘータ ヴァーターハタ・ナウル イヴァースパダナム  
*labheta vātāhata-naur ivāspadam*

*tataḥ*—それから; *anyathā*—離れて; *kiñcana*—なにか; *yat*—なんでも; *vivakṣataḥ*—説明したいと思う; *prthag*—別々に; *dṛśaḥ*—視野; *tat-kṛta*—それに対する反動; *rūpa*—姿; *nāmabhiḥ*—名前によって; *na karhicit*—決してない; *kvāpi*—どの; *ca*—そして; *duḥsthitā matir*—揺れ動く心; *labheta*—利益; *vāta-āhata*—風で乱される; *nauḥ*—舟; *iva*—のように; *āspadam*—場所。

主と関係のないことを話せば、それは本来の姿・名前・結果とは違ったものとなり、いたずらに心を刺激するだけである。あてもなく波間を漂う舟を風が刺激するように。

### 要旨解説

シュリー・ヴァーサデーヴァはヴェーダ経典に関するすべての解説書を著わした人物であり、果報的活動・推論知識・神秘的力・献愛奉仕など、さまざまな論法で超越的悟りについて説明しています。さらに、数々のプラーナをとおしてさまざまな姿や名前を持つ半神たちの崇拝を勧めています。しかしその結果、大衆は心をどのように主の奉仕に定めたらいいのかわからなくなっています。自己を悟る真の道が見つけられずに、いつも当惑しているのです。シュリーラ・ナーラダデーヴァは、ヴァーサデーヴァがまとめたヴェーダ経典のこの欠陥を指摘することで、すべてを至高主だけに結びつけ、それ以外のだれにも結びつけることなく説明しなくてはならない、と強調しています。事実、主以外に存在するものはありません。主はさまざまな拡張体としてみずからを表わしています。主は、いわば1本の木の根、そして体全体の胃とも言えます。木に水をかけるとき、水は「根」に注ぐものであり、食べ物を「胃」に入れることで体全体に力を行き渡らせることができます。ですから、シュリーラ・ヴァーサデーヴァは『バガヴァタ・プラーナ』以外にほかのプラーナを作る必要はありませんでした。自己を悟る道から少しでも逸れれば、大きな混乱が生じるかもしれないからです。少しの逸脱から大きな混乱が生じるのですから、絶対真理・人格主神からかけ離れた見解を意図的に広める結果は容易に

想像できます。半神崇拜の最大の欠陥は多神論を定着させることにあり、その結果、超越的な愛情奉仕をとおして神との永遠な絆に確実に導く『シュリーマド・バーガヴァタム』の教えを害する多くの宗派が作られます。吹き荒れる風に舟が翻弄されるという例は、この点を的確に表現しています。多神教者の逸脱した心は、自己の悟りの完成境地には絶対に辿りつくことができません。間違ったものを選んでしまったために、心が乱されているからです。

### 第 15 節

जुगुप्सितं धर्मकृतेऽनुशासतः  
स्वभावरक्तस्य महान् व्यतिक्रमः ।  
यद्वाक्यतो धर्म इतीतरः स्थितो  
न मन्यते तस्य निवारणं जनः ॥ १५ ॥

ジュグプシタム ダルマ・クリテ ヌシャーサタハ  
*jugupsitam dharma-kṛte 'nuśāsataḥ*

スヴァバハーヴァ・ラクタツシャ マハーン ヴァティクラマハ  
*svabhāva-raktasya mahān vyatikramaḥ*

ヤドゥ・ヴァーキャトー ダルマ イティータラハ ステイトー  
*yad-vākyato dharma itī taraḥ sthito*

ナ マンヤテー タツシャ ニヴァーラナム ジャナハ  
*na manyate tasya nivāraṇam janaḥ*

*jugupsitam*—きつく非難されるべき; *dharma-kṛte*—宗教にかかわることとして; *anuśāsataḥ*—教え; *svabhāva-raktasya*—自然にそう考えている; *mahān*—偉大な; *vyatikramaḥ*—不合理な; *yad-vākyataḥ*—だれの教えのもとに; *dharmaḥ*—宗教; *iti*—そのためそれは; *itaraḥ*—一般大衆; *sthitaḥ*—固定して; *na*—しない; *manyate*—考える; *tasya*—それの; *nivāraṇam*—禁止; *janaḥ*—かれらは。

大衆は楽しみたがっているものであり、あなたはその傾向を宗教の名のもとで助長させてしまった。これは咎められてしかるべきことであり、無分別きわまりない。かれらはあなたに導かれたために、そのような活動を宗教の名のもとでおこない、禁止されていることを無視するようになってしまった。

### 要旨解説

『マハーバーラタ』や他の経典で述べられている規則だてられた果報的活動にもとづいて、

シュリーラ・ヴァーサデーヴァがまとめたさまざまなヴェーダ経典が、ここでシュリーラ・ナーラダによって非難されています。人類は幾生涯を経て物質とかがわってきたため、物質エネルギーを支配しようとする自然な傾向を培ってきました。人としてはたすべき責任を感じることもなくなっています。しかし人間生活は、物質という幻想の束縛から逃れるチャンスです。ヴェーダは、私たちが神のもとへ、ふるさとへ帰るために用意されています。840万種類の生物のなかを果てしなく転生することは、悲運な条件づけられた魂には投獄生活そのものです。人間生活はその投獄生活から抜け出す好機であり、それゆえ、人類の唯一の努めは失った神との絆を甦らせることにあります。私たちはそのような状態にいるのですから、宗教活動の名目で感覚を喜ばせる計画は奨励されるに値しません。人としてのエネルギーを誤用すれば、間違っただけで導かれた文化が創りだされます。シュリーラ・ヴァーサデーヴァは『マハーバーラタ』を含むヴェーダの説明の権威者ですから、どういう形にせよ、感覚の楽しみを助長させたことは、精神生活の高揚にとって大きな障害を作りだしていることとなります。なぜなら、そのような説明を聞いた人々は、自分たちを縛りつけている物質的活動を捨てようと思わなくなるからです。人類文明のある時期、宗教を装った物質的な活動（ヤギヤの名目でおこなわれる動物の供儀祭など）があまりにもはびこったために、主は仏陀として降誕し、宗教の名目による屠殺の儀式を止めるためにヴェーダの権威を否定しました。ナーラダはそのような状態を予見できたからこそ、人々を誤って導く文献を非難したのです。肉食の人間は、宗教の名のもとで半神や女神のまえで今でも動物をいけにえにしていますが、その理由は、ヴェーダ経典の一部ではそのような規制された儀式が勧められているからです。肉食をしないよう勧められてはいるものの、やがてそのような宗教活動の主眼は忘れさられ、屠殺場が多く見受けられるようになりました。これは、愚かで物質的な人々が、ヴェーダ儀式について説明できる人々の話を聞かないことが原因です。

ヴェーダは、「あくせく働いても、財産をためても、人口が増えても人生の完成は達成できない」と明言しています。方法はただ一つ、放棄心です。物中心の人は、そのような教えを聞く気はありません。放棄生活は身体的理由で生活費を稼ぐことのできない人間か、あるいは家庭生活の繁栄を実現できなかった者たちのためにある、と考えています。

もちろん、『マハーバーラタ』にある史実には、物質的な話題に混じって超越的な話題も書かれています。『バガヴァッド・ギーター』は『マハーバーラタ』に含まれています。『マハーバーラタ』の言わんとすることは、「他のいっさいの仕事を放棄し、主シュリー・クリシュナの蓮華の御足に全身全霊をこめて仕えるべきである」という『バガヴァッド・ギーター』の究極の教えで頂点に達します。しかし、物質中心に考える人々は、『マハーバーラタ』が扱っ

ている政治・経済・慈善活動などに心が引かれ、もっとも大切な話題である『バガヴァッド・ギーター』には興味をしめしません。大衆に媚びているヴァーサデーヴァの姿勢は、ナーラダによって直接非難されました。「人間生活の最重要課題は、自分と主との永遠な絆を悟って一刻も早く主に身をゆだねることにある。あなたはそのことを率直に宣言すべきである」。ナーラダはそう助言したのです。

ある病気で苦しんでいる患者は、自分に禁じられている食べ物を口にしたいがるものです。熟練した医者は患者に妥協せず、食べるべきでない食べ物は禁じます。『バガヴァッド・ギーター』でも、果報的活動に執着している人に対して、そのような仕事をやめるよう勧めるべきではないと述べられています。自己を悟る境地に徐々に高められていくかもしれないからです。これは、精神的な悟りを持たずに無味乾燥な経験哲学だけに囚われている人々にも当てはまる場合があります。しかし、献愛奉仕に励んでいる人々にそのような助言は不要です。

## 第 16 節

विचक्षणोऽस्यार्हति वेदितुं विभो-  
रनन्तपारस्य निवृत्तितः सुखम् ।  
प्रवर्तमानस्य गुणैरनात्मन-  
स्ततो भवान्दर्शय चेष्टितं विभोः ॥ १६ ॥

ヴィチャクシャノー アシヤールハティ ヴェーデイトウンム ヴィボホール  
*vicakṣaṇo 'syārhati veditum vibhor*

アナンタ・パーラッシャ ニヴリッティタハ スカハンム  
*ananta-pārasya nivṛttitaḥ sukham*

ブラヴァルタマーナッシャ グナイル アナートウマナス  
*pravartamānasya guṇair anātmanas*

タトー バハヴァーン ダルシャヤ チェーシュティタンム ヴィボホー  
*tato bhavān darśaya ceṣṭitam vibhoḥ*

*vicakṣaṇaḥ*—非常に熟達した; *asya*—かれの; *arhati*—ふさわしい; *veditum*—理解するために; *vibhoḥ*—主の; *ananta-pārasya*—無限なお方の; *nivṛttitaḥ*—を捨てて; *sukham*—物質的な幸福; *pravartamānasya*—執着している人々; *guṇaiḥ*—物質的な質によって; *anātmanaḥ*—精神的価値の知識を持たずに; *tataḥ*—ゆえに; *bhavān*—あなた; *darśaya*—道を示しなさい; *ceṣṭitam*—活動; *vibhoḥ*—主の。

至高主は無限な方である。熟達し、物質的に幸福になるための活動を捨てた人物だけが、精神的価値を持つこの知識を理解するにふさわしい。ゆえにあなたは、物質的執着のために正しく位置されていない人々に至高主の崇高な活動について説明し、超越的悟りの道をしめさなくてはならない。

### 要旨解説

神学は難しく、とりわけ神の超越的な質に関する主題は難解をきわめます。物質的なことに没頭している人に理解できるものではありません。円熟した知性を持ち、精神的知識を高めて物質的行動をほぼ放棄した人だけが、この偉大な科学の勉強を許されます。『バガヴァッド・ギーター』では、無数の人々のなかでたった一人が超越的悟りの境地に入る資格を得る、とされています。さらに、そのような無数の人々のなかでも、特に神を人物とする神学を理解できるのは一握りの人々に限られます。ゆえにシュリー・ヴァーサデーヴァは、主の超越的な活動を率直に語って神の科学を説明するようナーラダに助言されました。ヴァーサデーヴァはこの科学に精通した人物であり、物質的な楽しみに囚われているわけでもありません。ですから、かれこそがそれを説明するにふさわしい人物であり、その子・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーも、その教えを受けとるにふさわしい人物です。

『シュリーマド・バーガヴァタム』は神学の頂点にある書物ですから、一般の人々には治療薬として効き目を現わします。主の崇高な活動について述べられているため、主とこの書物はまったく同じです。まさに主の文学書の化身なのです。ですから、一般の人々でも主の崇高な活動の説明を聞くことができます。その結果主と結ばれ、やがて物質的な病を治して清められていきます。熟達した献愛者は時代や環境に即応した新しい方法を見つけて、神に仕えていない人々の心を変えることができます。献愛奉仕は躍動的な活動であり、有能な献愛者は、その教えを物質主義的な人々の緩慢な頭脳に注ぐ効果的な方法を見つけだすことができます。主への奉仕として献愛者がおこなうそのような活動は、物質中心の愚かな社会に新しい秩序をもたらすことができます。主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブや主の足跡をたどる従者たちは、この方面ですぐれた手腕を発揮しました。同じ方法に従うことで、私たちは争いの現代に住む物質主義的な人々を、平和な生活と超越的な悟りの境地に導くことができます。

### 第 17 節

त्यक्त्वा स्वधर्मं चरणाम्बुजं हरे-  
र्भजनपक्वोऽथ पतेत्ततो यदि ।

यत्र क्व वाभद्रमभूदमुष्य किं

को वार्थ आसोऽभजतां स्वधर्मतः ॥ १७ ॥

テヤクトウヴァー スヴァ・ダハルマンム チャラナーンブジャンム ハレール  
*tyaktvā sva-dharmam caraṇāmbujam harer*

バハジャンー アパクヴォー タハ パテートウ タトー ヤディ  
*bhajann apakvo 'tha patet tato yadi*

ヤトウラ クヴァ ヴァーバドウランム アプフードウ アムッシャ キンム  
*yatra kva vābhadram abhūd amuṣya kim*

コー ヴァールタハ アープトー バハジャターンム スヴァ・ダハルマタハ  
*ko vārtha āpto 'bhajatām sva-dharmataḥ*

*tyaktvā*—捨て去って; *sva-dharmam*—自分に定められた職務; *caraṇa-ambujam*—蓮華の御足; *hareḥ*—ハリ (主) の; *bhajan*—献愛奉仕をしているときに; *apakvaḥ*—未熟な; *atha*—~の問題のために; *patet*—転落する; *tataḥ*—その位置から; *yadi*—もし; *yatra*—そうすると; *kva*—どのような種類の; *vā*—あるいは (皮肉的に); *abhadram*—不都合な; *abhūt*—起こるだろう; *amuṣya*—かれの; *kim*—なにもない; *kaḥ vā arthaḥ*—どのような興味; *āptaḥ*—得られる; *abhajatām*—非献愛者の; *sva-dharmataḥ*—職務上の奉仕をして。

主への献愛奉仕をするために物質的な仕事を放棄する人物は、未熟さゆえに道から逸れる可能性はあっても、成功しない危険性はない。いっぽう、献愛者でない者は、たとえ自分に定められた義務を完遂しても、得るものはなにもない。

### 要旨解説

人間には無数の義務があります。両親・家族・社会・国・他の生命体・半神、さらには偉大な哲学者・詩人・科学者たちに恩があります。経典は、そのような義務をいっさい放棄して主に奉仕をすることができる、と教えています。ですから、その言葉に従って主への献愛奉仕を見事に成し遂げるのであれば、それはすばらしいことです。しかし時として、一時的な衝動に駆られて主の奉仕に励んでも、やがてなんらかの理由で、望ましくないつきあいのために道から逸れることがあります。歴史にはそのような例が数多く残されています。バラタ・マハーラージャは、鹿に執着していたために鹿に生まれなくてはなりませんでした。前世で、死ぬまぎわに鹿のことを考えたからです。そのため次の世では、前世で起こったことを忘れはしなかったものの、鹿に生まれ変わらなくてはなりませんでした。またチトウラケートウも、シヴァの

蓮華の御足を冒瀆したために、精神的道から転落しています。しかし、このような出来事にもかかわらず、そして転落する可能性があるとしても、この節では主の蓮華の御足に身をゆだねることが強調されています。なぜなら、たとえ献愛奉仕に定められている義務をまっとうできなかったとしても主の蓮華の御足は決して忘れないからです。主に献愛奉仕を始めた人は、どのような状況に置かれてもその奉仕をつづけます。『バガヴァッド・ギーター』でも、ささやかな献愛奉仕をするだけで、もっとも危険な状態に転落する危険から救われる、とされています。歴史には、そのような事例が数多く残されています。アジャーミラもその一人です。若いころは献愛者だったのですが、ある時を境にして道から逸れました。それでも、最後には主に救われています。

### 第18節

तस्यैव हेतोः प्रयतेत कोविदो  
 न लभ्यते यद्भ्रमतामुपर्यधः ।  
 तल्लभ्यते दुःखवदन्यतः सुखं  
 कालेन सर्वत्र गभीररंहसा ॥ १८ ॥

タッシャイヴァ हेートーホ プラヤテータ コーヴィドー  
*tasyaiva hetoḥ prayateta kovido*

ナ ラビハヤテー ヤドゥ ブラマターナム ウパリ アダハ  
*na labhyate yad bhramatām upari adhaḥ*

タル ラビヤテー ドウフカハヴァドゥ アニヤタハ スカハンム  
*tal labhyate duḥkhavad anyataḥ sukham*

カーレーナ サルヴァトウラ ガビヘーラ・ランムハサー  
*kālena sarvatra gabhīra-ramhasā*

*tasya*—その目的のために; *eva*—だけ; *hetoḥ*—理由; *prayateta*—努力すべきである; *kovidāḥ*—哲学的思考を好む者; *na labhyate*—得られない; *yat*—であるもの; *bhramatām*—さ迷う; *upari adhaḥ*—頂点から最低まで; *tat*—それ; *labhyate*—得られる; *duḥkhavat*—苦悩があるように; *anyataḥ*—以前の活動の結果として; *sukham*—感覚の楽しみ; *kālena*—時がたつにつれて; *sarvatra*—どこでも; *gabhīra*—希薄な; *ramhasā*—進展。

真に聡明で哲学的思考を好む人々は、頂点の惑星ブラフマローカから最底辺の惑星パーターラを巡っても得られないその意義深い究極目的のために努力すべきである。感覚を楽しんで得られる幸福感は、時の流れに応じておのずと得られるものである。時の流れとともに、望んで



もないのに苦しみを味わうように。

### 要旨解説

どこのだれであっても、商売・産業・経済発展・政治勢力などに奔走したり、来世で高い惑星に行って幸福になろうと果報的活動に励む人々が、手を変え品を変えて感覚の楽しみを最大限味わおうとしています。月では、住民たちがソーマ・ラサ (soma-rasa) を飲んで高い感覚の喜びを味わうことができ、またピトゥリローカ (Pitṛloka) には慈善事業をすることで到達できる、と言われています。このように、現世や死後に感覚の楽しみを得るための多種多様な手段が用意されています。機械を使って月やほかの惑星に行こうとする人々もいますが、それは善行を積まずにそのような惑星に行きたがっているからです。しかしそれは実現しません。至高主の法則によって、死後の行き先は、さまざまな段階の生命体が生前おこなった活動に応じて決定されます。経典が定めているように、善行だけが良い家庭・富・高い教育・美貌やすぐれた体を授けてくれます。前世にかぎらず、今生きているあいだでも、善行のおかげで教育やお金に恵まれることがあります。同じように来世でも、正しいおこないだけですばらしい地位を得ることができます。このような条件があるからこそ、同じ場所・同じ時間に生まれた二人が過去の活動に応じた異なる状態に置かれているのです。しかし、その物質的状态はいつまでもつづくわけではありません。自分自身の活動しだいで、頂点のブラフマローカに行ったり最低位のパーターラに行ったりします。哲学的思考を好む人は、そのような不安定な状態に誘惑されてはなりません。星々を転々とするみじめな物質界に連れもどされることのない、至福と知識に満ちた永遠の生活を求めなくてはなりません。苦しみ、そして苦しみが混ざった幸福は物質生活にある2つの境遇であり、ブラフマローカでも他のローカ・惑星でも起こることです。半神の、そして犬や豚の生活でも同じことです。苦しみと幸福が混在した状況は、ただその程度や中味が違うだけで、結局はだれでも生老病死の苦しみから逃れることはできません。また、だれでも定められた幸福に出会います。すでに決められた幸不幸を個人の努力で増減させることはできません。つかんでも、やがてその手から離れていきます。ですから、このようなはかないことのために時間を無駄にしてはなりません。神のもとに帰るために切磋琢磨する、それが私たち生命体の使命なのです。

### 第19節

न वै जनो जातु कथञ्चनात्रजे-  
न्मुकुन्दसेव्यन्यवद्रा संसृतिम् ।

स्मरन्मुकुन्दाङ्घ्र्युपगूहनं पुन-  
विहातुमिच्छेन्न रसग्रहो जनः ॥ १९ ॥

ナ ヴァイ ジャノー ジャートウ カタハンチャナーヴラジェーン  
*na vai jano jātu kathañcanāvrajen*

ムクンダ・セーヴィ アニャヴァドゥ アンガ サンムスリティンム  
*mukunda-sevy anyavad aṅga saṁsṛtim*

スマラン ムクンダ-ングリ・ウパゲーハナンム プナル  
*smaran mukundāṅghry-upagūhanam punar*

ヴィハートウンム イच्छェーン ナ ラサ・グラホー ジャナハ  
*vihātum icchen na rasa-graḥo janaḥ*

*na*—決して～ない; *vai*—確かに; *janaḥ*—人物; *jātu*—どんなときでも; *kathañcana*—いつのまにか; *āvrajet*—経験しない; *mukunda-sevī*—主の献愛者; *anyavat*—他の人々のように; *aṅga*—親愛なる者よ; *saṁsṛtim*—物質存在; *smaran*—思い出している; *mukunda-aṅghri*—主の蓮華の御足; *upagūhanam*—抱きしめている; *punaḥ*—ふたたび; *vihātum*—捨てることを望んでいる; *icchet*—望み; *na*—決して～ない; *rasa-graḥaḥ*—その甘露を味わった者; *janaḥ*—人物。

ヴァーサデーヴァよ。主クリシュナの献愛者がなにかの理由で逸脱してしまうことはあるが、他の者たち（結果にこだわる活動者など）のような物質的狀態に陥ることはない。一度でも主の蓮華の御足の甘露を味わった人物は、かならずその法悦感を何度も思い出すからである。

### 要旨解説

主の献愛者は、主クリシュナの蓮華の御足の甘露を味わった人物、すなわちラサ・グラハ（*rasa-graha*）ですから、おのずと物質存在に魅了されなくなります。結果にこだわる活動者にいつも墮落する傾向があるように、主の献愛者が自分にそぐわないつきあいをしてしまったために奉仕の道から逸脱した例は数多く残されています。しかし、たとえそうだとした場合、献愛者と墮落したカルミー（*karmī*）とは絶対に同じではありません。カルミーは自分の活動の結果で苦しみますが、献愛者は主からの直接の懲罰によって矯正させられます。身寄りのない子の苦しみと、王に愛されている王子の苦しみは同じではありません。孤児は、自分を世話してくれる人がいないのですからほんとうに哀れなのですが、富豪の愛息は、孤児と同じ状態に見えても、いつでも有能な父親に見守られています。主の献愛者は、悪いつきあいに染まって果

報的活動者をまねることがあります。果報的活動者は物質界を支配したいと考えています。同じように初心の献愛者は、愚かなことに、献愛奉仕とひきかえに物質的な力を蓄えたいと思うことがあります。そのような愚かな献愛者は、主自身の意図によって困難に巻き込まれることがあります。主は特別の好意として、その献愛者の財産を取りさるかもしれませんが。主のそのような行動によって当惑した献愛者は友人や親族たちに見放され、やがて主の慈悲を授かって正気に戻り、ふたたび献愛奉仕の道を歩きはじめます。

『バガヴァッド・ギーター』も、逸脱した献愛者は、高貴な質をもつブラーフマナの家族や裕福な商家に生まれる機会が与えられる、と述べています。しかしそのような献愛者でも、主に罰せられて希望を失っている献愛者と比べれば幸運とは言えません。主の意志によって絶望的な状況に追いこまれた献愛者は、立派な家庭に生まれた者たちよりも幸運です。良家に生まれた献愛者は、（じつはそれほど幸運ではないため）主の蓮華の御足を忘れがちですが、孤立無援に追いこまれた献愛者は、だれも自分を助けてくれないことを知り、やがて主の蓮華の御足に戻ってくるからです。

純粋な献愛奉仕には高い精神的味わいがあり、献愛者はおのずと物質的な快樂に無頓着になっていきます。その境地が、躍進的な献愛奉仕が達成されている印です。純粋な献愛者は主シュリー・クリシュナの蓮華の御足を思いつづけ、ほんの一瞬たりとも、たとえ三界のすべての富を約束されたとしても、主を忘れることはありません。

## 第20節

इदं हि विश्वं भगवानिवेतरो  
 यतो जगत्स्थाननिरोधसम्भवाः ।  
 तद्धि स्वयं वेद भवांस्तथापि ते  
 प्रादेशमात्रं भवतः प्रदर्शितम् ॥ २० ॥

イダナム ヒ ヴィシュヴァナム バハガヴァーン イヴェータロー  
 idam hi viśvaṁ bhagavān ivetaro

ヤトー ジャガトウ・スタハーナ・ニローダハ・サンバハヴァーハ  
 yato jagat-sthāna-nirodha-sambhavāḥ

タドゥ デヒイ スヴァヤナム ヴェーダ バハヴァーンムス タタハーピ テー  
 tad dhi svayaṁ veda bhavāms tathāpi te

プラーデーシャ・マートウランム バハヴァータハ プラダルシタンム  
 prādeśa-mātraṁ bhavataḥ pradarśitam

idam—この; hi—すべて; viśvam—宇宙; bhagavān—至高主; iva—ほとんど同じ; itaraḥ—様々な姿; yataḥ—その人物から; jagat—世界; sthāna—存在する; nirodha—消滅; sambhavāḥ—創造; tat hi—～に関するすべて; svayam—個人的に; veda—知っている; bhavān—あなた自身; tathā api—それでも; te—あなたに; prādeśa-mātram—概説; bhavataḥ—あなたに; pradarsitam—説明した。

至高主・人格主神みずからがこの宇宙そのものであり、なおかつその宇宙から離れた境地におられる。この宇宙現象界は、主だけから放出され、主のうちに留まり、消滅後にふたたび主のうちに歩いていく。あなたはそのことをよく承知しているはずである。私は大意を述べているにすぎない。

### 要旨解説

純粋な献愛者にとって、ムクンダ（主シュリー・クリシュナ）の概念は、人物・非人物両方をそなえています。姿や形のない宇宙の状態はムクンダのエネルギーの表われですから、ムクンダです。たとえば、木はそれだけで完全体ですが、葉や枝はその木から表わされた部分体です。葉や枝を「木」と呼ぶことはできますが、木そのものは葉や枝とは違います。ヴェーダの見解である「全宇宙はブラフマンにほかならない」という表現は、「すべては至高のブラフマンから発生したものであるから、すべては主の部分にほかならない」という意味です。同じように、部分体である手や足を「体」と呼ぶことはできますが、1つの完全体としての体は手でも足でもありません。主は、永遠性・認識力・美しさを象徴する超越的な姿をそなえています。ですから、主のエネルギーによって創造された世界は、部分的に永遠で、知識にあふれ、そして美しさをそなえています。そのために、外的力・マーヤー（māyā）の力に魅惑されて条件づけられた魂たちは、物質自然が仕掛ける網に捕らえられるのです。そして、万物の究極の原因である主についてなにも知らないため、マーヤーがすべてだと思いこんでいます。さらに、体の一部分が体そのものから離れれば、もはや体につながっていた時の手や足とは違った存在になってしまう、ということも知りません。同じように、至高人格主神への崇高な愛情奉仕から離れている不敬な文化は、切り離された手や足も同然です。手や足に見えても、その機能をはたしていません。主の献愛者であるシュリーラ・ヴァーサデーヴァはこの状態をよく知っており、シュリーラ・ナーラダに、この点をさらに発展させるように助言を受けます。束縛された魂たちがヴァーサデーヴァから教えを授かることで、至高主を根源の原因者として理解できるように。

ヴェーダの見解では、主は本来完璧な力をそなえているため、主の至高の力もつねに完璧で

あり、主とまったく同じです。精神・物質両世界、そして双方にあるいっさい万物は、主の内的・外的力の表われです。2つの力を比較すると、外的力は劣り、内的力はすぐれています。優位の力とは生命力のことであり、ゆえに主と完全に同じですが、外的力には生命力がないため、部分的に同じです。しかしどちらの力も、主に比べれば等しくもすぐれてもいません。主はすべての力を作りだした方だからです。どちらの力もつねに主の支配下にあり、それは、電気のエネルギーがどれほど強くても、いつでも電気技師によって管理されている状態に似ています。

人類を含めたいっさいの生物は、人格主神の内的力によって作られました。つまり、生命体も主と同一である、と言えます。しかし、主に等しい、あるいは主よりもすぐれている、ということではありません。主も生命体も個々の人物として存在しています。生命体も物質の力を利用してなにかを作りだしていますが、そのどれ一つをとっても、主の創造に比べて等しいかすぐれたものはありません。人間は小さな玩具のようなスプートニク号を作って大気圏外に打ちあげはしましたが、だからと言って、主のように地球や月のような星を作って宇宙空間に浮遊させられるということではありません。知識に欠ける人間ほど、自分は神と同じだと公言するものです。主と対等になれるわけがありません。ぜったいにありえないことです。人間は、完璧な境地に到達したときに主の質の多くを（78パーセントまで）高めることができますが、主を凌いだり主と同等の境地に高められたりすることはありません。病におかされている愚か者だけが、主と一体になると吹聴し、その結果、幻想の力に翻弄されます。ですから、惑わされた生命体は主の至高性を受けいれ、主に愛情奉仕をすることに同意しなくてはなりません。そのために私たち生命体は創造されたのです。このことが実現されなければ、世界には平和も安らぎもありません。シュリーラ・ヴァーサデーヴァはシュリーラ・ナーラダに、『シュリーマド・バーガヴァタム』のこの教えを広めるよう助言されました。『バガヴァッド・ギーター』でも同じことが説かれています。主の蓮華の御足にみずからをすべてゆだねるように、という教えです。それだけが、完璧な人間のためにある責務なのです。

## 第21節

त्वमात्मनात्मानमवेद्यमोघदृक्

परस्य पुंसः परमात्मनः कलाम् ।

अजं प्रजातं जगतः शिवाय त-

न्महानुभावाभ्युदयोऽधिगण्यताम् ॥ २१ ॥

トゥヴァンム アートウマナートゥマーナンム アヴェーヒ アモーガハ・ドゥリク  
*tvam ātmanātmānam avehy amogha-dṛk*

パラッシャ プンムサハ パラマートウマナハ カラーンム  
*parasya puṁsaḥ paramātmanaḥ kalām*

アジャンム ブラジャータンム ジャガタハ シヴァーヤ タン  
*ajam prajātam jagataḥ śivāya tan*

マハーヌバハーヴァービュダヨー ディガニヤターンム  
*mahānubhāvābhyudayo 'dhigaṇyatām*

*tvam*—あなた自身; *ātmanā*—自分自身によって; *ātmānam*—至高の魂; *avehi*—探し出す; *amogha-dṛk*—完璧なヴィジョンを持つ者; *parasya*—超越性の; *puṁsaḥ*—人格主神; *paramātmanaḥ*—至高主の; *kalām*—完全部分体; *ajam*—誕生しない; *prajātam*—誕生した; *jagataḥ*—世界の; *śivāya*—幸福のために; *tat*—それ; *mahā-anubhāva*—人格主神シュリー・クリシュナの; *abhyudayaḥ*—娯楽; *adhigaṇya-tām*—非常に明確に説明しなさい。

あなたには完璧な視野がそなわっている。そして、主の完全部分体として存在しているため、至高の魂・人格主神を知ることができる。あなたは誕生しない人物だが、万人の幸福のために地上に降誕した。だから、どうか、至高人格主神シュリー・クリシュナの崇高な娯楽についてさらに鮮明に説明していただきたい。

### 要旨解説

シュリーラ・ヴァーサデーヴァは、人格主神シュリー・クリシュナの完全分身として力を授かっています。物質界に入った魂たちを救うために、いわれなき慈悲の心で降誕しました。転落し、なにもかも忘れさった魂たちは、主への超越的愛情奉仕とは無縁の状態にいます。生命体は主の部分体であり、主の永遠な召使いでもあります。ですから、どのヴェーダ経典も、転落した魂たちを幸せにするために系統的に整えられており、かれらもその文献を活用して物質存在の束縛から解放されなくてはなりません。シュリーラ・ナーラダ・リシはシュリーラ・ヴァーサデーヴァの形式的な精神指導者ではありますが、ヴァーサデーヴァは精神指導者にまったく依存しているわけではありません。じつは、かれこそが万民の精神指導者なのですから。しかし、アーチャーリヤの責務を帯びていたことから、神自身であったにもかかわらず、「精神指導者はかならず受け入れなくてはならない」という鉄則をみずからの行動で私たちにしめしたのです。主シュリー・クリシュナ、主シュリー・ラーマ、主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブは神の化身であり、神の超越性ゆえにあらゆる知識をそなえていたのですが、形

式的ながら精神指導者を受けいれています。一般の人々を主シュリー・クリシュナに導くために、主はみずからヴァーサデーヴァという化身として降誕し、主の超越的な娯楽について描写したのでした。

## 第22節

इदं हि पुंसस्तपसः श्रुतस्य वा  
स्विष्टस्य सूक्तस्य च बुद्धिदत्तयोः ।  
अविच्युतोऽर्थः कविभिर्निरूपितो  
यदुत्तमश्लोकगुणानुवर्णनम् ॥ २२ ॥

イダナム ヒ プムサス タパサハ シュルタツシャ ヴァー  
*idam hi puṁsas tapasaḥ śrutasya vā*

スヴィシュタツシャ スークタツシャ チャ ブッデヒイ・ダッタヨーホ  
*sviṣṭasya sūktasya ca buddhi-dattayoḥ*

アヴィチュトー ルタハハ カヴィビヒル ニルーピトー  
*avicyuto 'rthaḥ kavibhir nirūpito*

ヤドウ・ウッタマシュローカ・グナーヌヴァルナナム  
*yad-uttamaśloka-guṇānuvarṇanam*

*idam*—これ; *hi*—確かに; *puṁsaḥ*—万人の; *tapasaḥ*—苦行の力によって; *śrutasya*—ヴェーダ研究の力によって; *vā*—または; *sviṣṭasya*—犠牲; *sūktasya*—精神的教育; *ca*—そして; *buddhi*—知識の修養; *dattayoḥ*—慈善; *avicyutaḥ*—絶対確実な; *arthaḥ*—関心; *kavibhiḥ*—認められた博識な人物によって; *nirūpitaḥ*—結論づけられた; *yat*—であるもの; *uttamaśloka*—選び抜かれた詩節によって描写される主; *guṇa-anuvarṇanam*—～の超越的質の説明。

苦行・ヴェーダの研究・儀式・マントラの吟唱・慈善は知識を高めるための完全無欠の目標であり、それらを実践して辿りつくのは、選び抜かれた詩節によって讃えられる主の超越的な描写である——博識者たちはそのように結論づけた。

## 要旨解説

人間の知性は、芸術・科学・哲学・物理学・化学・心理学・経済学・政治学などの学問の進歩のために高められるべきです。そのような知識の修養によって、人類は理想的な生活を達成できます。その生活の完成は、至高の生物ヴィシュヌの悟りにおいて頂点に達します。ですか

らシュルティは、真に学識を高めた人々は主ヴィシュヌへの奉仕を求めよ、と命じています。しかし残念なことに、ヴィシュヌ・マーヤーのうわべの美しさに心が奪われている人々は、完璧な境地や自己の悟りはヴィシュヌの助けがあってこそ実現できるということが理解できません。ヴィシュヌ・マーヤーとは感覚の楽しみのことであり、得るのはむなしさと苦しみだけです。ヴィシュヌ・マーヤーの罠に捕らえられている人々は、知識の発達も感覚の楽しみのためにある、と思っています。シュリー・ナーラダ・ムニは、宇宙のいっさい万物は主のさまざまな力から放出されたものであると説明しました。なぜなら、私の想像を絶する力を使って主が創造界の動きとその反動を始動させたからです。すべては主の力から放出され、主の力に維持され、消滅されたあとふたたび主のなかに入っていきます。ですから、主と関係のないものはなにもありませんが、同時に、主はそれらを超越した立場にいます。

知識の発達が主への奉仕に使われるとき、その手段がすべて完璧になります。人格主神とその超越的な名前・名声・栄光などは主とまったく同じです。ですから、主に仕える聖者や献愛者たちは、芸術・科学・哲学・物理学・化学・心理学などのあらゆる知識は、全面的に主への奉仕に向けるべきである、と勧めています。芸術・文学・詩・絵画などは、主を讃えるために使うことができます。小説作家・詩人・著名な文学者は読者の感覚に訴えることを書くものですが、かれらの興味が主への奉仕に向けられれば、主の崇高な娯楽について描写できます。ヴァールミーキは偉大な詩人、またヴァーサデーヴァは偉大な作家であり、かれらは主の超越的な活動の描写に全力で取り組み、そして不死身になりました。科学や哲学も主への奉仕に向けられるべきです。感覚を満たすために空しい推論をして何が得られましょう。哲学と科学は主の栄光を揺るぎないものにするために使うべきです。高い知識を持つ人々は科学をとおして絶対真理を学びたいと願っていますから、偉大な科学者は、科学的根拠を出して主の存在を証明するよう努力すべきです。哲学的推論にしても、至高の真理者を「意識を持ち、あらゆる力をそなえる人物」として確立させなくてはなりません。どのような知識もつねに主の奉仕に使うべきです。『バガヴァッド・ギーター』も同じことを確証しています。主の奉仕に使われていない「知識」はどれも無知にすぎません。高度な知識を正しく使って主の栄光を確立させることが、なによりも大切なことです。主への奉仕に使われている科学的知識、そして同様の活動はすべてハリ・キールタナ (hari-kīrtana)、すなわち主の称讃です。

### 第23節

अहं पुरातीतभवेषुभवं मुने  
दास्यास्तु कस्याश्चन वेदवादिनाम् ।



## निरूपितो बालक एव योगिनां

शुश्रूषणे प्रावृषि निर्विविक्षताम् ॥ २३ ॥

アハンム プラーティータ・バハヴェー バハヴァンム ムネー  
*aham purātīta-bhave 'bhavam mune*

ダーツシャース トウ カツシャーシュチャナ ヴェーダ・ヴァーディナーンム  
*dāsyās tu kasyāścana veda-vādinām*

ニルूपितो バラカ エーヴァ ヨーギナーンム  
*nirūpito bālaka eva yoginām*

シュシュルーシャネー プラーヴリシ ニルヴィヴィクシャターンム  
*śuśrūṣaṇe prāvṛṣi nirvivikṣatām*

*aham*—私; *purā*—以前; *atīta-bhave*—前カルパ（ブラフマーの一生）期に; *abhavam*—～になった; *mune*—おお、ムニよ; *dāsyāḥ*—下女の; *tu*—しかし; *kasyāścana*—特定の; *veda-vādinām*—ヴェーダーンタの従者の; *nirūpitaḥ*—従事して; *bālakaḥ*—少年の召使い; *eva*—にすぎない; *yoginām*—献愛者達の; *śuśrūṣaṇe*—～の奉仕において; *prāvṛṣi*—雨期の4か月のあいだ; *nirvivikṣatām*—共に住んでいる。

ムニよ。ブラフマーの前創造期で、私は、ヴェーダーンタの原則に従うブラーフマナたちに仕える下女の息子だった。ブラーフマナたちが雨期の4ヶ月間集まって住んでいたあいだ、私は身近にかれらに仕えていた。

### 要旨解説

主に捧げる愛情奉仕のすばらしさを、この節でシュリー・ナーラダ・ムニが概説しています。かれは最下層の家庭に生まれた子で、まともな教育も受けていませんでした。それでも、持てる能力をすべて使って主に仕えたために、不死身の聖者に変貌したのです。それが、献愛奉仕の力強さの表われです。生命体は主の中間の力ですから、主への超越的な愛情奉仕を適切に実行できるよう存在しています。それが適切に為されていない状態をマーヤーといいます。ですから、マーヤーが持つ幻想の力は、持てる力をすべて、感覚の楽しみではなく、主への奉仕に向けるときに消えていきます。シュリー・ナーラダ・ムニ自身の前世という実例から、「主への奉仕は主の正しい召使いに仕えることから始まる」ということが明白になります。主の召使いに仕えることは、主に直接仕えることよりもすぐれている、と主も言っています。献愛者への奉仕は主への奉仕よりも価値があるのです。ですから、いつも主に仕えている誠実な献愛者

を精神指導者として選び、その師に誠意をこめて仕えなくてはなりません。そのような精神指導者は、物質的感覚では理解できない主の姿を弟子にしめしてくれる透明な媒体者です。誠実な精神指導者に仕えることで、主は、捧げられる奉仕の質に応じて自分自身を私たちにしめしてくれます。主への奉仕に全力を注ぐことで、解放の道を実際に進むことができます。正しい精神指導者に導かれて主とつながりのある奉仕をすれば、全創造宇宙界と主が同じであることに気づくようになります。熟達した精神指導者はすべてを利用して主を称讃する方法を知っているのです、人々がそのような人物に導かれれば、その神聖な恩寵によって世界は精神的住居に変貌するのです。

## 第 2 4 節

ते मय्यपेताखिलचापलेऽर्भके  
दान्तेऽधृतक्रीडनकेऽनुवर्तिनि ।  
चक्रुः कृपां यद्यपि तुल्यदर्शनाः  
शुश्रूषमाणे मुनयोऽल्पभाषिणि ॥ २४ ॥

テー マイー アペーターキヒラ・チャーパレー ルバハケー  
*te mayy apetaākhila-cāpale 'rbhake*

ダーンテー ドフウリタ・クリーダナケー アヌヴァルティニ  
*dānte 'dhṛta-kṛīdanake 'nuvartini*

チャクルフ クリパーンム ヤデヤピ トウリヤ・ダルシャナーハ  
*cakruḥ kṛpām yadyapi tulya-darśanāḥ*

シュシュルーシャマーネー ムナヨー ルパ・バハーシニ  
*śuśrūṣamāṇe munayo 'lpa-bhāṣiṇi*

*te*—かれらは; *mayi*—私に対し; *apeta*—経験することなく; *akhila*—あらゆる種類の; *cāpale*—性癖; *rbhake*—少年に対して; *dānte*—感覚を抑制して; *adhṛta-kṛīdanake*—娯楽を楽しむ習慣がない; *anuvartini*—従順な; *cakruḥ*—授けた; *kṛpām*—いわれの無い慈悲; *yadyapi*—～ではあっても; *tulya-darśanāḥ*—生来公平な; *śuśrūṣamāṇe*—誠実な者に対して; *munayaḥ*—ヴェーダーンタに従うムニ; *lpa-bhāṣiṇi*—必要以上の話をしない者。

このヴェーダーンタの従者たちはだれとでも公平に接する人々だったが、私にはいわれの無い慈悲を授けてくださった。私は幼い子どもではあったが、みずからを律し、遊ぶことに興味はなかった。さらに、悪さをすることもなく、無意味なことは話さない子だった。

## 要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』で主は、「すべてのヴェーダがわたしを探している」と言っています。主シュリー・チャイタンニャは、ヴェーダには、「生命体と人格主神との絆を確立させること」、「献愛奉仕に関係のある義務を遂行すること」、「その結果究極のゴールである神のもとに辿りつくこと」、という3つの主題しかないと言っています。そのため、ヴェーダーンタの従者であるヴェーダーンタ・ヴァーディー (vedānta-vādi) は、人格主神の純粋な献愛者を指しています。そのようなヴェーダーンタ・ヴァーディーあるいはバクティ・ヴェーダーンタ (bhakti-vedānta) は、献愛奉仕にかかわる崇高な知識を分けへだてなく人々に教えます。かれらにとって、だれであろうと敵でも友人でもありません。人を見て、教養があるとかないとか、特に好意をしめしたり嫌ったりすることはありません。バクティ・ヴェーダーンタたちは、大衆が間違った物欲のために時間を無駄にしていることを知っています。だからこそ、無知な大衆が失った人格主神との絆を甦らせられるよう働いています。その努力によって、すべてを忘れさった魂でさえ精神生活の思いに目覚め、やがてバクティ・ヴェーダーンタの弟子となり、超越的な悟りの道を徐々に進むことができるようになります。このヴェーダーンタ・ヴァーディーたちは、幼いこの子が自分を抑えたり無邪気な遊びなどをやめたりするまえから弟子として受けいれました。しかしかれ (少年) は入門式を受けるまえから、精神生活の高揚を目指す人に欠かせない規律に熟達していききました。真の人間生活の始まりであるヴァルナーシュラマ・ダルマ体制では、王様の子であれ一般市民の子であれ、5歳以上の少年たちはブラフマチャーリーになるためにグルのアーシュラマに入り、正しい教育を系統的に受けます。その訓練は、国のためにすぐれた市民を育てるために必要であることはもちろん、その子自身が将来精神的悟りを得るためにも欠かせないものです。ヴァルナーシュラマ体制の従者の子どもたちは、物欲を満たすだけの無責任な生活をまったく知りません。子どもたちは、父親によって母親の胎内に置かれるまえから精神的な洞察力を授けられています。父親も母親も、子どもが物質の束縛から無事に解放されるよう見守る責任があります。それが、家族計画を成功させる正しい方法であり、完璧な完成を得るために子どもをもうけなくてはなりません。自己を抑制しなければ、規律を守らなければ、そして心から従順でなければ、精神指導者の教えに正しく従うことはできませんし、またそれが実践できなければ、神のもとに帰ることはできません。

## 第25節

उच्छिष्टलेपाननुमोदितो द्विजैः  
सकृत्स भुञ्जे तदपास्तकिल्बिषः ।

एवं प्रवृत्तस्य विशुद्धचेतस-  
स्तद्धर्म एवात्मरुचिः प्रजायते ॥ २५ ॥

ウッチシュタ・レーパーン アヌモディトー ドウヴィジャイヒ  
*ucchiṣṭa-lepān anumodito dvijaiḥ*

サクリトウ スマ ブランジェー タドウ・アパースタ・キルビシャハ  
*sakṛt sma bhuñje tad-apāsta-kilbiṣaḥ*

エーヴァンム プラヴリッタツシャ ヴィシュッダハ・チェータサス  
*evam pravṛttasya viśuddha-cetasas*

タドウ・ダハルマ エーヴァートウマ・ルチヒ プラジャーヤテー  
*tad-dharma evātma-ruciḥ prajāyate*

*ucchiṣṭa-lepān*—食べ物の残り; *anumoditaḥ*—許可を得て; *dvijaiḥ*—ヴェーダーンタ・ブラーフマナー達によって; *sakṛt*—昔; *sma*—過去において; *bhuñje*—食べた; *tad*—その行為によって; *apāsta*—取り除かれた; *kilbiṣaḥ*—すべての罪; *evam*—そのように; *pravṛttasya*—従事して; *viśuddha-cetasas*—心が浄化された人物の; *tad*—その特定の; *dharmaḥ*—性質; *eva*—確かに; *ātma-ruciḥ*—超越的な魅力; *prajāyate*—表わされた。

一度だけ、かれらの食べ残しを許しを得ていただいたことがあり、そのことでたちまち私の罪は跡形もなく消えていった。このように仕えていくうちに私の心はさらに清められ、その超越主義者たちの特質に心惹かれていった。

### 要旨解説

純粋な献愛奉仕は、（もちろん良い意味で）伝染病のように強い感染力を持っています。心のきれいな献愛者は、どのような罪にもけがされません。人格主神はもともと純粋な生命体ですから、だれであっても、物質に影響されないほど純粋でなければ主の純粋な献愛者にはなれません。このバクティ・ヴェーダーンタたちは純粋な献愛者で、少年もかれらとの交流によって、そしてかれらが残した食べ物を1度食べただけで、その純粋な性質を受けつぎました。そのような残り物は、純粋な献愛者たちの許しがなくても食べることはできます。まがいものの献愛者もいますから、そのような輩にはよくよく気をつけなくてはなりません。献愛奉仕を始めようとする人を邪魔する要素はいくらでもあります。しかし、心のきれいな献愛者と交流すればどのような障害も取りのぞかれるものです。初心の献愛者は、純粋な献愛者の崇高な気質によって自分も高められ、人格主神の名前・名声・質・超越的な娯楽などへの魅力を感じるよ

うになります。純粋な献愛者の気質を受けつぐという表現は、人格主神の神聖な活動の話聞くたびに、その純粋な愛情奉仕の甘露を感じとるようになることを指しています。この超越的な甘露を味わうと、物質的な物事いっさいが味気ないものに思えてきます。だからこそ心の清らかな献愛者は、物質的な活動にまったく惹かれないのです。すべての罪を洗い流し、あるいは献愛奉仕の障害を克服した人は、その奉仕に惹かれ、動じなくなり、完璧な甘露を味わい、神聖な感情に浸り、やがて主への愛情奉仕に立脚した境地に入ることができます。このような段階は純粋無垢な献愛者との交流をとおして高まっていくのであり、それがこの節の要点です。

## 第26節

तत्रान्वहं कृष्णकथाः प्रगायता-  
 मनुग्रहेणाशृण्वं मनोहराः ।  
 ताः श्रद्धया मेऽनुपदं विशृण्वतः  
 प्रियश्रवस्य ममाभवद्गुचिः ॥ २६ ॥

タトゥラーンヴァハンム クリシュナ・カタハーハ プラガーヤターンム  
*tatrānvaham kṛṣṇa-kathāḥ pragāyatām*

アヌグラヘーナーシュリナヴァンム マノーハラーハ  
*anugraheṇāśṛṇavam manoharāḥ*

ターハ シュラッダハヤー メー アヌパダナム ヴィシュリンヴァタハ  
*tāḥ śraddhayā me 'nupadam viśṛṇvataḥ*

プリヤシュラヴァッシ アンガ ママーバハヴァドゥ ルチヒ  
*priyaśravasy aṅga mamābhavad ruciḥ*

*tatra*—そこで; *anu*—毎日; *aham*—私は; *kṛṣṇa-kathāḥ*—主クリシュナの活動の話; *pragāyatām*—説明している; *anugraheṇa*—いわれのない慈悲によって; *śṛṇavam*—聴覚を使って; *manah-harāḥ*—魅力的な; *tāḥ*—それら; *śraddhayā*—敬意をこめて; *me*—私に; *anupadam*—毎瞬間; *viśṛṇvataḥ*—注意深く聞いている; *priyaśravasi*—人格主神の; *aṅga*—おおヴァーサデーヴァよ; *mama*—私のもの; *abhavat*—そのようになった; *ruciḥ*—味わい。

ヴァーサデーヴァよ。そのような交流をとおして、また偉大なヴェーダーンタ学者たちの慈悲によって、私は、主クリシュナの魅力的な活動にまつわるかれらの話を聞くことができた。その話に一心に耳をかたむけることで、人格主神について聴く楽しみは次第に深まっていった。

## 要旨解説

主シュリー・クリシュナ、絶対人格主神は、その姿はもちろんのこと、活動そのものも私たちを引きつけてやみません。なぜなら、絶対者は、みずからの名前・名声・姿・娯楽・仲間・主にまつわる品々などを含み、絶対的な存在だからです。主はいわれなき慈悲心で物質界に降誕し、人間としてさまざまな神聖な娯楽を繰りひろげましたが、それは、そうして主の美しさに心を奪われた人々が主のもとに帰ることができるように、という配慮からでした。人は、通俗なことをするさまざまな人物たちの歴史や物語を聞きたがるものですが、そのようなかわりのために貴重な時間を無駄にし、物質自然界の3つの質に心奪われてしまうことを知りません。時間を無駄にするのではなく、自分の関心を主の神聖な娯楽に向けることで精神的成功をおさめることができます。主のそのような娯楽の話に傾聴すれば主とじっさいにふれあうことができ、前述したように、心に積まれてきた罪は主にまつわる話を聞くことで、心の内から、すべて流れでていきます。このように罪をことごとく捨てた読者たちは、次第に俗なつきあいから解放され、主の姿に心惹かれるようになります。ナーラダ・ムニは、そのことを自分の体験をとおして説明しています。この話の要旨は、主の神聖な娯楽をただ聞くだけで、主の仲間の一人になれるということです。ナーラダ・ムニは永遠の命と無限の知識と果てしない至福に満たされ、物質・精神両方の世界を意のままに旅することができます。正しい情報源から主の崇高な娯楽について聞く人はもっとも気高い人生に到達します。それはシュリー・ナーラダが、前世で純粋な献愛者たち（バクティ・ヴェーダーンタ）の話を傾聴したことで実証しています。献愛者と交流しながら主にまつわる話を傾聴する方法は、争い渦巻くカリ現代において特に勧められています。

## 第27節

तस्मिंस्तदा लब्धरुचेर्महामते  
प्रियश्रवस्यस्वलित्ता मतिर्मम ।  
ययाहमेतत्सदसत्स्वमायया  
पश्ये मयि ब्रह्मणि कल्पितं परे ॥ २७ ॥

タスミンス タダー ラブダハ・ルチェール マハー・マテ  
*tasmiṁs tadā labdha-rucer mahā-mate*

プリヤシュラヴァッシ アスカハリター マティル ママ  
*priyaśravasy askhalitā matir mama*

ヤヤーハンム エータトウ サドゥ・アサトウ スヴァ・マーヤヤー  
*yayāham etat sad-asat sva-māyayā*

パッシャー マイ ブラフマニ カルピタンム パレー  
*paśye mayi brahmaṇi kalpitam pare*

*tasmin*—そうであるために; *tadā*—そのとき; *labdha*—達成した; *ruceḥ*—味わい; *mahā-mate*—おお偉大な聖者よ; *priyaśravasi*—主について; *askhalitā matiḥ*—途切れることのない集中力; *mama*—私のもの; *yayā*—それによって; *aham*—私は; *etat*—これらすべて; *sat-asat*—濃密と希薄; *sva-māyayā*—自分の無知; *paśye*—見る; *mayi*—私の中の; *brahmaṇi*—至高者; *kalpitam*—受け入れる; *pare*—超越性の中で。

偉大な聖者ヴァーサよ。主への愛情という甘露を味わった結果、主にまつわる話を聞こうとする私の集中心は不動のものとなった。その味わいが深まっていくごとに、濃密・希薄な肉体という覆いを受け入れたのは私の無知の結果だったことに気づいた。主も私も超越的な存在なのだから。

### 要旨解説

物質存在という無知は暗闇にたとえられ、そして全ヴェーダ経典で人格主神は太陽にたとえられています。光ある場所に暗闇はありません。主の崇高な娯楽について聞くことは、主とその娯楽がまったく同じであることから、聞く行為そのものが主との超越的なふれあいです。至高の光とふれあうことで、すべての無知を消しさることができます。条件づけられた魂は、無知ゆえに自分も主も物質自然界の産物であると誤解しています。しかしじっさいは主も生命体も超越的な存在にあり、物質自然界とはなんの関係はありません。人格主神抜きでは何も存在できないことを理解するとき、無知の暗闇は消えていきます。濃密・希薄な体は人格主神から放出されたものですから、私たちは知識という光に導かれて両方の体を主のために使うことができます。肉体は主に仕えるため（水を汲んだり、寺院を掃除したり、お辞儀をしたりなど）に使うことができます。アルチャナー（*arcanā*）・寺院における神像崇拜には、主への奉仕に体を使うことが含まれています。同じように、希薄な心は主の超越的な娯楽について聞くことに使い、その内容を熟考し、主の名前を唱えたりすることに使えます。どれも超越的な活動です。濃密・希薄どちらの体も、物質的なことに使うべきではありません。超越的な活動についてそのように悟るには長年にわたる献愛奉仕の修練が必要ですが、主への愛情だけでもそれはかならず実現します。ナーラダ・ムニが傾聴するだけでその愛情を高めているのですから。

## 第 28 節

इत्थं शरत्प्रावृषिकावृतू हरे-  
विशृण्वतो मेऽनुसवं यशोऽमलम् ।  
सङ्कीर्त्यमानं मुनिभिर्महात्मभि-  
भक्तिः प्रवृत्तात्मरजस्तमोपहा ॥ २८ ॥

イッタハンム シャラトウ・ブラーヴリシカーヴ リトウー ハレール  
*ittham śarat-prāvṛṣikāv ṛtū harer*

ヴィシュリンヴァトー メー ヌサヴァンム ヤシヨー マラン  
*viśṛṇvato me 'nusavam yaśo 'malam*

サンキールチャマーナム ムニビヒル マハートウマビヒル  
*saṅkīrtiyamānam munibhir mahātmabhir*

バハクティヒ プラヴリッタートウマ・ラジャス・タモーパー  
*bhaktiḥ pravṛttātma-rajas-tamopahā*

*ittham*—こうして; *śarat*—秋; *prāvṛṣikau*—雨期; *ṛtū*—2つの季節; *hareḥ*—主の; *viśṛṇvataḥ*—絶えず聞いている; *me*—私自身; *anusavam*—絶えず; *yaśaḥ amalam*—純粋無垢な栄光; *saṅkīrtiyamānam*—～によって唱えられて; *munibhiḥ*—偉大な聖者達; *mahā-ātmabhiḥ*—偉大な魂達; *bhaktiḥ*—献愛奉仕; *pravṛttā*—流れ始めた; *ātma*—生命体; *rajaḥ*—激性; *tama*—無知; *upahā*—消滅している。

こうして、雨期と秋という2つの季節に、私はこの偉大な魂たちが主ハリの純粋な栄光を唱えつつけているのを聞く機会にめぐまれた。私の献愛奉仕の流れが始まったとき、やがて激性と無知の覆いは打ち碎かれた。

## 要旨解説

至高主への神聖な愛情奉仕は、すべての生命体にそなわっている自然な行為です。その思いはどのような生物のなかにも眠っているのですが、物質自然とかかわっているために、激性と無知がその思いを太古の昔から隠しつつけています。もしある魂が、主の恩寵によって、そして主の偉大な魂である献愛者たちの恩寵によって、純粋な献愛者との交流を得る幸運にめぐまれ、そして主のけがれなき栄光を聞く機会にめぐまれれば、まちががなく、川の流れのように献愛奉仕は流れはじめます。川が海に辿りつくまで流れつづけるように、純粋な献愛奉仕は純粋な献愛者との交流によって、行きつくところ、すなわち神への崇高な愛情に向けて流れつづ



けます。献愛奉仕の流れはだれにも止められません。それどころか、流れる量は増えつづけます。この流れには大きな力がこめられており、その奉仕を見る人でさえ激性と無知の影響から解放されます。2つの性質はこうして取りのぞかれ、生命体は自分本来の境地に戻り、そして解放されるのです。

## 第29節

तस्यैवं मेऽनुरक्तस्य प्रश्रितस्य हतैनसः ।  
श्रद्धधानस्य बालस्य दान्तस्यानुचरस्य च ॥ २९ ॥

タッシュアイヴァンム メー ヌラクタツシャ  
*tasyaivam me 'nuraktasya*

ブラシュリタツシャ ハタイナサハ  
*praśritasya hatainasaḥ*

シュラッドダハーナツシャ バーラツシャ  
*śraddadhānasya bālasya*

ダーンタツシャーヌチャラツシャ チャ  
*dāntasyānucarasya ca*

*tasya*—かれの; *evam*—こうして; *me*—私のもの; *anuraktasya*—かれらに執着して; *praśritasya*—従順に; *hata*—～から自由な; *enasah*—罪; *śraddadhānasya*—忠実な人物の; *bālasya*—体の; *dāntasya*—従属させて; *anucarasya*—教えに厳格に従っている; *ca*—そして。

私は聖者たちに強い愛着を感じていた。私は穏やかにふるまい、これまでの罪は聖者たちに仕えるうちにすべて消えていった。心のなかにはかれらに対する堅い信念が築かれ、感覚の動きを抑えながら、私は体と心を使ってかれらに忠実に従った。

## 要旨解説

これが、純粹無垢な献愛者の境地に高められるために必要な候補者の資格です。その境地を望むからには、つねに純粹な献愛者との交流を求めるべきです。偽物献愛者に騙されてはなりません。純粹な献愛者の教えを受け入れるためにも、腹蔵のない、そして穏やかな人物であるべきです。純粹な献愛者とは、人格主神に身も心もゆだねている人物を指します。人格主神が至高の所有者であること、そして他の魂はだれでも主の召使いであることをよく理解しているのです。純粹な献愛者とのまじわりだけが、俗なつきあいによって積み重ねられた罪を洗い流

することができます。初心の献愛者は純粋な献愛者に誠実に仕え、教えには従順かつ厳格に従わなくてはなりません。これらが、現世で完成を達成することを心に誓っている献愛者の印です。

### 第30節

ज्ञानं गुह्यतमं यत्तत्साक्षाद्भगवतोदितम् ।  
अन्ववोचन् गमिष्यन्तः कृपया दीनवत्सलाः ॥ ३० ॥

ギヤーナム グヒヤタマンム ヤトウ タトウ  
*jñānam guhyatamaṁ yat tat*

サークシャードウ バハガヴァトーディタンム  
*sākṣād bhagavatoditam*

アンヴァヴォーチャン ガミッシャンタハ  
*anvavocan gamiṣyantaḥ*

クリパヤー ディーナ・ヴァトウサラハ  
*kṛpayā dīna-vatsalāḥ*

*jñānam*—知識; *guhyatamaṁ*—もっとも秘奥な知識; *yat*—～であるもの; *tat*—それ; *sākṣāt*—直接に; *bhagavatā uditam*—主みずからが説いた; *anvavocan*—教えを授けた; *gamiṣyantaḥ*—～から去っていくとき; *kṛpayā*—いわれのない慈悲によって; *dīna-vatsalāḥ*—哀れで慎ましい者に非常に親切な人々。

哀れな魂たちにこのうえなく優しいバクティ・ヴェーダーンタたちは、その場を去るとき、主神みずからが説いた秘奥な知識を私に説いた。

### 要旨解説

純粋なヴェーダーンタ学者、すなわちバクティ・ヴェーダーンタは、主自身が説いた教えをそのまま従者たちに伝えます。人格主神は、『バガヴァッド・ギーター』や他の経典のなかで、主だけに従うよう明言しています。主は万物の創造者・維持者・破壊者です。表わされた全創造界は主の意志によって存在し、また主の意志によって宇宙の営みがすべて終焉を迎えるとき、主はみずから創造したものすべてとともに永遠の住居にとどまります。創造のまえに主はその永遠な住居にいましたし、破壊のあともその場所にとどまります。ですから、主は創造された生物の一人ではありません。超越的な人物なのです。主は『バガヴァッド・ギーター』でアルジュナに語りました——あなたに教えを説く遙か以前にこの教えを太陽神に説いたが、時代の

推移につれて内容が歪められたために継承が絶えた、だから今、同じ教えをふたたびあなたに説いている、あなたがわたしの完璧な献愛者で友人だから、と。つまり、主の教えは献愛者だけが理解できるのであり、それ以外の人々にはわからないということです。主の崇高な姿についてまったく知らない非人格論者は、主のもっとも秘奥なこの教えは理解できません。「もっとも秘奥な」という言葉は重要です。献愛奉仕の知識は非人格的ブラフマンの知識をはるかに超えているからです。ギャーナン (*jñānam*) は、通常の知識あるいは知識そのものを指します。この知識は非人格的ブラフマンの知識にまで高めることができます。その上には、献愛奉仕と部分的に共通するパラマートマー、つまり遍在する神の知識の段階があります。ブラフマンの知識よりも秘奥な境地です。しかし、そのような知識が純粋な献愛奉仕に変化し、超越的知識の秘奥な段階に達すると、それが「もっとも秘奥な知識」と呼ばれます。このもっとも秘奥な知識が主によって、ブラフマー、アルジュナ、ウッダヴァたちに授けられました。

### 第31節

येनैवाहं भगवतो वासुदेवस्य वेधसः ।  
मायानुभावमविदं येन गच्छन्ति तत्पदम् ॥ ३१ ॥

イエーナイヴァーハンム バハガヴァトー  
*yenaivāhaṁ bhagavato*

ヴァースデーヴァッシャ ヴェーダハサハ  
*vāsudevasya vedhasaḥ*

マーヤーヌバハーヴァンム アヴィダンム  
*māyānubhāvam avidaṁ*

イエーナ ガッチャンティ タトウ・パダンム  
*yena gacchanti tat-padam*

*yena*—それによって; *eva*—確かに; *aham*—私は; *bhagavataḥ*—人格主神の; *vāsudevasya*—主シュリー・クリシュナの; *vedhasaḥ*—至高の創造者の; *māyā*—力; *anubhāvam*—影響; *avidaṁ*—簡単に理解した; *yena*—それによって; *gacchanti*—かれらは行く; *tat-padam*—主の蓮華の御足に。

私は、その秘奥な知識をとおして万物の創造者・維持者・破壊者である主シュリー・クリシュナの力の働きをはっきりと悟った。そのような悟りを得る人はだれでも主のもとに帰り、主その方に会うことができる。

## 要旨解説

献愛奉仕すなわちもっとも秘奥な知識をとおして、主のさまざまな力がどう働いているかを容易に知ることができます。主の1つの力が物質界を作りだし、別の（すぐれた）力が精神界を作りだし、そして中間の力が、これらの力のどちらかに仕える生命体を作りだします。物質の力に仕えている生命体は生存と幸福のために苦闘していますが、それはかれらにとって幻想にほかなりません。いっぽう精神的力のなかにいる生命体は、永遠の生活、完全な知識、永続する至福のなかで主に直接仕えています。主みずから『バガヴァッド・ギーター』で述べているように、物質の力の世界で墮落しきっている条件づけられた魂たち全員が、物質界と縁を切って自分のもとに帰ってくることを願っています。これこそがもっとも秘奥な知識です。しかし、これは純粋な献愛者だけが理解できることであり、そのような献愛者が神の王国に入って主にめぐりあい、主に仕えます。その模範となる人物が、永遠の知識と至福の境地に到達したナーラダです。その道や方法はだれにでもしめされていますが、シュリー・ナーラダ・ムニの足跡に従う人だけが達成することができます。シュルティ・マントラには、至高主は（みずから努力することなく）無限の力を持ち、それらが上記の3つの主な名称をとおして説明されています。

## 第32節

एतत्संमूचितं ब्रह्मस्तापत्रयचिकित्सितम् ।  
यदीश्वरे भगवति कर्म ब्रह्मणि भावितम् ॥ ३२ ॥

エータトウ サンムスーチタンム プラフマンムス  
*etat saṁsūcitam brahmaṁs*

ターパ・トウラヤ・チキトウシタンム  
*tāpa-traya-cikitsitam*

ヤドゥ イーシュヴァレー バハガヴァティ  
*yad īṣvare bhagavati*

カルマ プラフマニ バハーヴィタンム  
*karma brahmaṇi bhāvitam*

*etat*—この程度; *saṁsūcitam*—博識者によって決定された; *brahman*—おお、ブラーフマナ・ヴァーサよ; *tāpa-traya*—3種類の苦しみ; *cikitsitam*—治療法; *yad*—～であるもの; *īṣvare*—至高の支配者; *bhagavati*—人格主神に; *karma*—定められた活動; *brahmaṇi*—偉大な人物に; *bhāvitam*—捧げられて。

ブラーフマナ・ヴァーサデーヴァよ。あらゆる問題や苦しみを取りのぞく最善の方法は、自分の活動を至高主・人格主神（シュリー・クリシュナ）に捧げることである、と博識ある人々が断言している。

### 要旨解説

シュリー・ナーラダ・ムニがみずから体験したように、解放への道を歩いたり人生のすべての苦しみから救われたりするもっとも実現可能な方法は、正しい情報源から主の超越的な活動について素直に聞くことです。これが、唯一の治療法です。全物質界は苦しみに満ちています。愚かな人々は、体や心、自然災害、他の生物によって生じるこのような三重の苦しみを取りのぞく方法を、ちっぽけな頭脳で数多く作りあげました。全世界がこのような苦しみから逃れようともがいていますが、どんな計画や治療法をめぐるしても、主の許しがなければ、待ち望んでいる平安は実現されないことを人類は知りません。患者を治すどのような治療も、主が許さなければ効果はありません。どれほど安全な船で川や海を渡ろうとしても、主の許可がなければ無事に渡りきることはできません。正しく知っておくべきことは、主が究極の許諾者なのだから、究極の成功を得るために、あるいは成功の道を邪魔する物を取りのぞくために、主の慈悲を求めて全霊をこめて努力すべきだということです。主は遍在し、あらゆる力をそなえ、全知全能です。善悪すべての努力に対して最終的な許可を与える人物です。ですから、主の慈悲が授かるれるよう行動することを学び、主を非人格なブラフマン、局所的なパラマートマー、そして至高人格主神として受け入れなくてはなりません。自分がだれであろうと問題ではありません。すべてを主の奉仕に捧げるのです。博識な学者・科学者・哲学者・詩人であれば、持てる教養を主の至高性を確立させるために使ってください。生涯をとおして、主のエネルギーについて研究してください。主を非難してはいけなく、価値のない知識をかき集めて主の真似事をしてはいけません。管理者・政治家・軍人なら、政治的手腕を使って主の至高性を確立してください。シュリー・アルジュナのように、主のために戦うのです。最初、偉大な戦士であるシュリー・アルジュナは戦いを拒みましたが、しかし、戦いは避けられないことを主に諭されて確信したとき、それまでの決心を翻して主のために戦いました。同じように、実業家や農業従事者は、苦勞して稼いだお金を主のために使えばいいのです。手に入れた金銭はすべて主の富であることを胸に刻んでいてください。富は幸運の女神（ラクシュミー）、また主はナーラーヤナ、すなわちラクシュミーの夫です。ラクシュミーを主ナーラーヤナのために使い、そして幸せになってください。それが、生涯をとおして主を理解する方法です。帰するところ、あらゆる物質的活動から解放され、主の崇高な娯楽を一心に聞くことが最善の生き方です。し

かし、そのような機会に恵まれていなければ、自分が特に魅力を感じていることを主のために使ってください。それが平和と繁栄に辿りつく道です。この節にある *samsūcitam* (サンムスーチタンム) という言葉にも重要な意味がこめられています。ナーラダの悟りを、子どもが考えるような絵空事と思ってはなりません。そうではないのです。それは、熟達し教養ある学者が到達した悟りであり、それが *samsūcitam* という言葉の真意です。

### 第 3 3 節

आमयो यश्च भूतानां जायते येन सुव्रत ।  
तदेव ह्यामयं द्रव्यं न पुनाति चिकित्सितम् ॥ ३३ ॥

アーマヨー ヤシュ チャ プフターナーンム  
*āmāyo yaś ca bhūtānām*

ジャーヤテー イェーナ スヴラタ  
*jāyate yena suvrata*

タドゥ エーヴァ ヒ アーマヤム ドウラヴァンム  
*tad eva hy āmayam dravyam*

ナ プナーティ チキトウシタンム  
*na punāti cikitsitam*

*āmayaḥ*—病気; *yaḥ ca*—なんであつても; *bhūtānām*—生命体の; *jāyate*—可能になる; *yena*—その作用によって; *suvrata*—おお、すぐれた魂よ; *tat*—その; *eva*—まさに; *hi*—確かに; *āmayam*—病気; *dravyam*—物事; *na*—そうではないか; *punāti*—治す; *cikitsitam*—〜で処置する。

おお、善良なる魂よ。ある病気を生じさせた物質を、逆に治療薬として使えば、その物質がその病気を治すことがある。

### 要旨解説

腕利きの医者は、治療食を使って患者を治そうとします。たとえば、乳製品は腸障害を起こすことがあります。同じミルクを凝乳にして別の治療薬と混ぜて処方することで腸障害を治療することができます。同じように、物質存在の三重苦は物質的な活動で静めることはできませんが、その物質的活動を精神的活動に変えればいいのです。鉄が真っ赤になって火と同質になるのと同じです。また、ある物質的概念も、主への奉仕に向けられることで変化します。そ

れが精神的成功の秘訣です。物質自然界を支配しようとしてはいけませんし、物質的な物事を拒絶するだけでも不十分です。逆境に善処する最善策は、すべてを至高の生物・神と関係させて使うことにあります。すべては至高の魂である主から放出されたものであり、主は私たちの想像もおよばない力を使って、精神を物質に、物質を精神に変えることができます。ですから、物質的な物事（と一般的に言われるもの）でも、主の最善の意志によって精神的力に変化します。その変化に必要な条件は、いわゆる物質的とされるものを魂本来の奉仕に利用することにあります。それが、私たちの物質的な病気を治し、苦しみや嘆きや恐れのない精神的境地に私たちを高める方法です。このようにすべてが主への奉仕に使われれば、至高のブラフマン以外に存在するものはないことが体験できます。ヴェーダのマントラが説く「すべてはブラフマンである」という教えは、こうして悟ることができるのです。

### 第34節

एवं नृणां क्रियायोगाः सर्वे संसृतिहेतवः ।  
त एवात्मविनाशाय कल्पन्ते कल्पिताः परे ॥ ३४ ॥

エーヴァンム ヌリナーンム クリヤー・ヨーガーハ  
*evam nṛṇām kriyā-yogāḥ*

サルヴェー サンムスリティ・ヘータヴァハ  
*sarve saṁsṛti-hetavaḥ*

タ エーヴァートウマ・ヴィナーシャーヤ  
*ta evātma-vināśāya*

カルパンター カルピターハ パレー  
*kalpante kalpitāḥ pare*

*evam*—こうして; *nṛṇām*—人類の; *kriyā-yogāḥ*—すべての活動; *sarve*—すべて; *saṁsṛti*—物質存在; *hetavaḥ*—原因になる; *te*—それ; *eva*—確かに; *ātma*—活動という大木; *vināśāya*—殺すこと; *kalpante*—できるようになる; *kalpitāḥ*—捧げる; *pare*—超越的存在に向けて。

このように、主のために行動することで、今まで自分を縛りつけていた同じ行動によって、活動という束縛の木を切り倒すことができるようになる。

## 要旨解説

生命体を絶えまなくあやつっている果報的活動は、地中深く根を張っているために、『バガヴァッド・ギーター』で菩提樹にたとえられています。活動の結果を楽しみたいと思っただけで、おこなったことに応じて肉体や場所を変えながら転生をつづけなくてはなりません。楽しもうとする気持ちは、主の使命を満たそうとする望みに変えることができます。そうすれば活動そのものがカルマ・ヨーガ (karma-yoga) に変貌します。すなわち、自分の性質に応じた活動をしながら精神的完成を得る方法になるのです。この節で使われている *ātmā* (アートルマー) はあらゆる果報的活動そのものを指しています。結論として、果報的活動の結果やその他の活動がすべて主のためにおこなわれるとき、活動者はさらなるカルマの発生を止め、徐々に超越的な献愛奉仕へ高められる、と言えます。そして、菩提樹の根を切断するにとどまらず、活動者を主の蓮華の御足へと導いていきます。

要点として、まずヴェーダーンタ哲学に精通していることは言うまでもなく、自己を悟り、主シュリー・クリシュナ・人格主神に仕える純粋な献愛者との交流を求めする必要があります。初心の献愛者は、純粋な献愛者との交流をつづけながら、心と体を使ってのびのびと愛情奉仕をしなくてはなりません。そのような心がけが、偉大な魂のなかに慈しみの心を授けようとする思いを起こさせます。そしてその優しさによって、純粋な献愛者の神聖な気質が初心の献愛者のなかに注ぎこまれるのです。慈悲を授かった献愛者は主の崇高な娯楽を聞こうとする熱意をしないで高め、濃密・希薄な体の本質を、その体を超えた純粋な魂に関する知識を、そして至高の魂すなわち人格主神との永遠の絆を理解できるようになります。永遠の絆が築かれ、互いの関係が認識されるとき、主への無垢な奉仕は非人格的ブラフマンと局所的なパラマートマーの悟りを超え、さらに人格主神に関する完璧な知識へと徐々に高められていきます。『バガヴァッド・ギーター』が説いているように、このようなプルショータマ・ヨーガ (*puṣottama-yoga*) によって、私たちは肉体のなかにいながらにして完璧な境地に入ることができ、主のすべての高貴な質をもっとも高い段階にまで高めることができます。これが、純粋な献愛者との交流による段階的な高まりです。

## 第35節

यदत्र क्रियते कर्म भगवत्परितोषणम् ।  
ज्ञानं यत्तदधीनं हि भक्तियोगसमन्वितम् ॥ ३५ ॥

ヤドゥ アトウラ クリヤテー カルマ  
*yad atra kriyate karma*



バハガヴァトウ ・パリトーシャナンム

*bhagavat-paritoṣaṇam*

ギャーナンム ヤトウ タドウ アデヒーンナンム ヒ

*jñānam yat tad adhīnam hi*

バクティ・ヨーガ ・サマンヴィタンム

*bhakti-yoga-samanvitam*

*yat*—なんでもあっても; *atra*—この生涯あるいは世界で; *kriyate*—実行する; *karma*—活動; *bhagavat*—人格主神に; *paritoṣaṇam*—～の満足; *jñānam*—知識; *yat tat*—そのように呼ばれるもの; *adhīnam*—依存して; *hi*—確かに; *bhakti-yoga*—献愛奉仕; *samanvitam*—バクティ・ヨーガと合致して。

現世で主の使命を実現させるためにすることはすべて、バクティ・ヨーガ、すなわち主への崇高な愛情奉仕と呼ばれ、一般的に知識と呼ばれているものはその奉仕に付随する要素となる。

### 要旨解説

経典がしめすとおりに果報的活動をすれば、精神的悟りに必要な超越的知識を完璧に得られる、という考えが一般的に、そして広く知られています。またバクティ・ヨーガを、別の形のカルマであると考えている人たちがいます。しかし、じつはバクティ・ヨーガはカルマもギャーナも超えています。バクティ・ヨーガはギャーナとカルマからは独立していますが、ギャーナとカルマはバクティ・ヨーガに依存しています。シュリー・ナーラダがヴァーサに助言したように、このクリヤー・ヨーガは主を満足させることが原則であるため、特に勧められています。主は我が子である生命体たちが三重苦に苦しむことのないよう願っています。すべての子どもが自分のもとに戻り、共に住んでほしいと思っていますが、神のもとに帰るためには、物質的けがれを捨てて清い心を持たなくてはなりません。ですから、ある行為が主を満足させるために為されれば、その行為者は物質的けがれから徐々に清められていきます。清められるとは、精神的な知識を得る、ということです。ですから、知識はカルマ、すなわち主のために為された活動によって得られるものです。それ以外の知識は、バクティ・ヨーガという主の満足とはかかわりがないため、神のもとには導いてくれません。つまりそのような知識は、この章の第12節で *naiṣkarmyam apy acyuta-bhāva-varjitam* (ナイシュカルミヤンム アピ アチュタ・バーヴァ・ヴァルジタンム) と説明されているように、解放でさえも授けてはくれません。結論として、特に主の神々しい栄光について聞いたり唱えたりしながら主に純粹に仕えている献愛者は、『バガヴァッド・ギーター』が確証しているように、神聖な恩寵のおかげで同時に精神的な悟りも授かっている、ということが言えます。

### 第36節

कुर्वाणा यत्र कर्माणि भगवच्छिक्षयासकृत् ।  
गृणन्ति गुणनामानि कृष्णस्यानुस्मरन्ति च ॥ ३६ ॥

クルヴァーナー ヤトウラ カルマーニ  
*kurvāṇā yatra karmāṇi*

バハガヴァチ・チクシャヤーサクリトウ  
*bhagavac-chikṣayāsakṛt*

グリナンティ グナ・ナーマーニ  
*gṛṇanti guṇa-nāmāni*

クリシュナツシャーンスマランティ チャ  
*kṛṣṇasyānusmaranti ca*

*kurvāṇāḥ*—実践しているあいだ; *yatra*—そこですぐに; *karmāṇi*—義務; *bhagavat*—人格主神; *śikṣayā*—～の意志によって; *asakṛt*—絶えず; *gṛṇanti*—持つようになる; *guṇa*—質; *nāmāni*—名前; *kṛṣṇasya*—クリシュナの; *anusmaranti*—絶えず思い続けている; *ca*—そして。

シュリー・クリシュナ、至高人格主神の命令に従って義務を遂行しながら、修練者は主を、主の名前を、そして主の質を絶えず思いつづけている。

### 要旨解説

主の円熟した献愛者は、現世や来世のためにあらゆる任務をはたしながら、主の名前・名声・質などをいつも思っているよう生活を組みたてることができます。主の命令は『バガヴァッド・ギーター』に明言されています。どのような生活をしていても、いつも主のためだけに働かなくてはならない、ということです。私たちは生涯を通じて、主を真の所有者として位置づけなくてはなりません。ヴェーダ儀式の決まりでは、インドラ、ブラフマー、サラスヴァティー、ガネーシャなどを崇拝するときでさえ、その儀式の支配力であるヤゲーシュヴァラ (*yajñeśvara*) がヴィシュヌの権化として儀式執行中に存在してはなりません。ある目的のために特定の半神を崇拝することは勧められていますが、なおかつ、円滑な儀式執行のためにヴィシュヌの存在は不可欠です。

ヴェーダの義務以外にしても、日常生活（たとえば、家庭や勤務先）でも活動の結果はすべて至高の受益者である主クリシュナに捧げるもの、と考えるべきです。『バガヴァッド・ギー

ター』で主は、「わたしがすべての至高の受益者、すべての惑星の至高の所有者、すべての生命体の至高の友人である」と宣言しています。主シュリー・クリシュナ以外に、創造界の万物の所有者であることを断言できる者はいません。純粋な献愛者はこの事実をいつも考えながら、主の超越的な名前・名声・質を繰り返しかえし口にしてはいるのですが、そうすることで主ともふれあっています。主は、主の名前や名声などとまったく同じですから、主の名前や名声を唱えたり思ったりするのは、じっさいに主と交流しているということなのです。

収入の大部分、少なくとも50パーセントは、主クリシュナの命令を実行するために使うべきです。さらに、収入の一部をそのように使うだけではなく、このバクティの教えを人々に伝える努力もしなくてはなりません。それも主の命令の1つだからです。主は、全世界で主の名前と名声を広めるためにがんばっている献愛者ほど愛しい者はいない、と断言しています。科学上の発見も、主の命令を実行するために使うことができます。主は、『バガヴァッド・ギーター』のメッセージが献愛者同士で語りあわれることを望んでいます。それは、苦行・慈善・教育などの価値を理解できない人々にはできないことかもしれません。ですからその試みは、主の献愛者になるつもりのない人々を変えるために為されるべきです。このことについて、主チャイタンニャがとてもかんたんな方法を私たちに教えています。歌い、踊り、楽しく食べる、という方法をとおして超越的なメッセージを広めるよう説いたのです。ですから、収入の50パーセントはこのために使うべきです。争いと意見の衝突が繰り返される墮落した現代では、主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブが説いたように、社会の指導者や裕福な人々が収入の半分を主への奉仕に使えば、かならず、地獄のような混乱状態にある世界は主の神聖な住居に変貌します。楽しい歌や踊り、そしておいしい料理が用意されている催し物があったら、行かない人はいません。だれでもその輪に加わるでしょうし、一人ひとりが主の崇高な存在を感じるはずで、ただそれだけで参加者は主とふれあうことができ、そして心を清めて精神的悟りを高めることができます。そのような精神的活動を成功させる唯一の条件は、それが純粋な献愛者の導きでおこなわれることにあります。純粋な献愛者に俗な望みはいっさいありませんから、欲得づくの活動に興味を持たず、主について無意味な空想はしません。主がどういう方なのか自分でつきとめる必要はありません。主みずから『バガヴァッド・ギーター』で語っていることだし、数々のヴェーダ経典でも説明されています。それらの記述をすべて受け入れ、主のその教えに従いさえすればいいことです。それを実行できる人が完成の道に導かれます。いる立場にいつづけてもかまいません。多事多難の現代ですから、自分の地位を変える必要はありません。ただ一つの条件は、主と一体化しようとする無味乾燥な推論癖をやめることです。主と融合するという高慢で横柄な虚栄心を捨てれば、これまで述べた質を持つ正しい献

愛者の口から『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』にある主の命令が素直に受けいられるようになります。それがすべてを確実に成功させる方法です。

### 第37節

ॐ नमो भगवते तुभ्यं वासुदेवाय धीमहि ।  
प्रद्युम्नायानिरुद्धाय नमः सङ्कर्षणाय च ॥ ३७ ॥

オーナム ナモー バハガヴァテー トゥビヤナム

*om namo bhagavate tubhyam*

ヴァースデーヴァーヤ デヒーマヒ

*vāsudevāya dhīmahī*

プラデュムナーヤーニルツダハーヤ

*pradyumnāyāniruddhāya*

ナマハ サンカルシャナーヤ チャ

*namaḥ saṅkarṣaṇāya ca*

*om*—主の超越的な栄光を唱える印; *namaḥ*—主にお辞儀を捧げる; *bhagavate*—人格主神; *tubhyam*—あなたに; *vāsudevāya*—ヴァースデーヴァの子である主へ; *dhīmahī*—共に唱えよう; *pradyumnāya, aniruddhāya and saṅkarṣaṇāya*—ヴァースデーヴァのすべての完全拡張体; *namaḥ*—敬意をこめたお辞儀; *ca*—そして。

ヴァースデーヴァの栄光を、そしてその完全拡張体であるプラデュムナ、アニルツダ、サンカルシャナの栄光を共に讃えようではないか。

### 要旨解説

『パンチャラートラ』は、ナーラーヤナを主神の全拡張体の根源であると述べています。それは、ヴァースデーヴァ (Vāsudeva)、サンカルシャナ (Saṅkarṣaṇa)、プラデュムナ (Pradyumna)、アニルツダ (Aniruddha) のことです。ヴァースデーヴァとサンカルシャナは、向かって中央のそれぞれ左と右に立ち、プラデュムナはサンカルシャナの右側に、そしてアニルツダはヴァースデーヴァの左側に立ち、このように4人の主神が並んでいます。4人は、主シュリー・クリシュナの副神として知られています。

この節は、オームカーラ プラナヴァ (*omkāra praṇava*) で始まるヴェーダ聖歌・マントラであり、このようにマントラは *om namo dhīmahī* (オーム ナモー デヒーマヒ) などの超越的な唱

名法として構築されています。

これまでの話の要点は、果報的活動にしる、経験哲学にしる、至高主の超越的な悟りに導かない活動は無価値だという点にあります。ゆえにナーラダジーは、熱心な愛情奉仕を段階的に高めて主と生命体が持っている親交心を深めていく、という方法を自分の経験をとおして説明しました。主への超越的な熱意が高まり、ついにはラサ (rasa・情感) と呼ばれる超越的多様性に包まれた愛情奉仕・プレーマー (premā) に到達します。そのような献愛奉仕は混ざりあった形で、すなわち果報的活動や哲学的推論と混ざりあった形でおこなわれることもあります。

この節では、精神指導者を介して達成したスータの境地についてシャウナカを筆頭とするリシたちが尋ねたことが、33の語句から成るこの聖歌で説明されています。そしてこのマントラは、4人の主宰神、あるいは完全拡張体を伴う主に向けて詠まれています。完全部分体は主の副神ですから、中心となる人物は主シュリー・クリシュナです。この教えのもっとも秘奥な部分は、主シュリー・クリシュナ・至高人格主神の栄光を、主の完全部分体であるヴァースデーヴァ、サンカルシャナ、プラデュムナ、ア Nil ッダとともに唱え、思いだすべきである、という点にあります。これらの4拡張体は、他のヴィシュヌ・タットヴァ (viṣṇu-tattva) やシャクティ・タットヴァ (śakti-tattva) の根源です。

### 第38節

इति मूर्त्यभिधानेन मन्त्रमूर्तिममूर्तिकम् ।  
यजते यज्ञपुरुषं स सम्यग्दर्शनः पुमान् ॥ ३८ ॥

イティ ムールティ・アビヒダハーネーナ  
iti mūrty-abhidhānena

マントウラ・ムールティンム アムールティカンム  
mantra-mūrtim amūrtikam

ヤジャテ ヤギヤ・プルシャナム  
yajate yajña-puruṣam

サ サミヤグ ダルシャナハ プマーン  
sa samyag darśanaḥ pumān

iti—ゆえに; mūrty—代表者; abhidhānena—音として; mantra-mūrtim—超越的な音の姿としての権化; amūrtikam—物質的な姿を持たない主; yajate—崇拜する; yajña—ヴィシュヌ; puruṣam—人格主神; saḥ—かれだけ; samyak—完璧に; darśanaḥ—見た者; pumān—人物。

ゆえにそのような修練者は、物質的な姿を持たないヴィシュヌ・至高人格主神を超越的な音の権化として崇拝している真の目撃者である。

### 要旨解説

感覚はすべて物質でできていますから、主ヴィシュヌの崇高な姿を悟るには不完全な道具といえます。ですから主は、唱名という超越的な方法をとおして音の権化として崇拝されます。不完全な感覚で得られる経験を超えた物事は、音という媒体をとおして理解することができます。遠い場所から発信されている人の声を受信して聞くことができる——物質的に可能なら、精神的にも可能はずです。この体験は、漠然とした非人格的な体験ではありません。永遠性・至福・知識という純粋な姿を持つ崇高な人格主神を実体験する境地です。

『アマラコーシャ』というサンスクリット語辞典では、*mūrti* (ムールティ) を「姿」と「困難」という2つの意味で定義しています。そのため、*amūrtikam* (アムールティカンム) はシュリー・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラによって「困難なく」と説明されています。永遠な至福と知識にあふれた主の超越的な姿は、本来の精神的感覚によって知覚できることであり、それは聖なるマントラ・超越的な音の権化によってよみがえらせることができます。その音は、正しい精神指導者という穢れのいっさいない代表者から受けいれるべきであり、唱え方も精神指導者の導きが必要です。その手段に従えば主のもとに徐々に近づくことができます。この崇拝法は、権威ある、そして認められたパンチャラトウリカ体系で勧められています。パンチャラトウリカ体系は、超越的な献愛奉仕を教えてくれるもっとも由緒正しい規律です。そのような規律の助けなくして主に近づくことはできず、まして無味乾燥な空論で実現できるはずがありません。パンチャラトウリカ体系は争いの現代では実践的かつ適切であり、現代ではヴェーダーンタよりも重要だと言えます。

### 第39節

इमं स्वनिगमं ब्रह्मन्वेत्य मदनुष्ठितम् ।  
अदान्मे ज्ञानमैश्वर्यं स्वस्मिन् भावं च केशवः ॥ ३९ ॥

イマンム スヴァ・ニガマンム ブラフマン  
*imaṁ sva-nigamaṁ brahmann*

アヴェーチャ マドウ・アヌシュティタンム  
*avetya mad-anuṣṭhitam*

アダーン メー ギャーナンム アイシュヴァリヤンム  
*adān me jñānam aiśvaryaṁ*

スヴァスミン バハーヴァンム チャ ケーシャヴァハ  
svasmin bhāvaṁ ca keśavaḥ

imam—このように; sva-nigamam—至高人格主神に関連したヴェーダの秘奥な知識; brahman—おお、ブラーフマナ（ヴァーサデーヴァ）よ; avetya—それをよく知っていて; mat—私によって; anuṣṭhitam—実行した; adāt—私に授けられた; me—私に; jñānam—超越的な知識; aiśvarya—富; svasmin—個人的な; bhāvam—親密な愛着と愛情; ca—そして; keśavaḥ—主クリシュナ。

ブラーフマナよ。このようにして私は、ヴェーダの秘奥な箇所を繰り返して説かれている主に関する超越的な知識を至高主クリシュナから最初に授かり、つぎに精神的富、さらに主への親密な愛情奉仕を授かった。

#### 要旨解説

超越的な音をとおして主とふれあうことは、全体的な魂である主シュリー・クリシュナとの交流にほかなりません。それは主に近づくための完全な方法です。献愛者は主との純粋な交流によって、唱名に関する10の禁令の1つである「唱名への物質的概念」を持たずに、物質的狀態を超越し、崇高な世界に住む主などについて描写するヴェーダ經典の真意を理解できるようになります。精神指導者と至高主に揺るぎない信念を持つ人物に、主はみずからを現わします。そのあと、献愛者は8種類の神秘的な富を授かります。さらに高められる献愛者は主の親しい仲間として迎えられ、精神指導者という代表者をとおして主への特別な奉仕をまかせられます。心の清らかな献愛者は、心の内に秘められている神秘的な力をひけらかすことよりも、主への奉仕に関心を持っています。シュリー・ナーラダはこれらを見ずからの体験をとおして説明し、私たちも、シュリー・ナーラダが主の音の権化について唱える方法を完成させて得た便宜をすべて授かることができます。師弟継承・パラंपラー上にいるナーラダの代表者をとおして受けがれるこの超越的な音は、だれでも何事にも邪魔されずに唱えることができるのです。

#### 第40節

त्वमप्यदभ्रश्रुत विश्रुतं विभोः  
समाप्यते येन विदां बुभुत्सितम् ।  
प्रारब्धाहि दुःखैर्मुहुरदितात्मनां  
संचो शनिर्वाणमुशन्ति नान्यथा ॥ ४० ॥

トゥヴァンム アピ アダブラ・シュルタ ヴィシュルタンム ヴィボホーホ  
*tvam apy adabhra-sruta viśrutam vibhoḥ*

サマーピャター イェーナ ヴィダーナム プブフトウシタンム  
*samāpyate yena vidām bubhutsitam*

プラークヤーヒ ドウフカハイル ムフル アルディタートウマナーナム  
*prākhyāhi duḥkhair muhur arditātmanām*

サンクレーシャ・ニルヴァーナナム ウシャンティ ナーニヤター  
*saṅkleśa-nirvāṇam uśanti nānyathā*

*tvam*—善き人よ; *api*—もまた; *adabhra*—広大な; *śruta*—ヴェーダ経典; *viśrutam*—も聞いた; *vibhoḥ*—全能者の; *samāpyate*—満たされて; *yena*—それによって; *vidām*—博識者の; *bubhutsitam*—超越的な知識についていつも聞きたいと願う人; *prākhyāhi*—説明する; *duḥkhair*—苦しみによって; *muhur*—いつも; *ardita-ātmanām*—苦しんでいる大衆; *saṅkleśa*—苦しみ; *nirvāṇam*—軽減; *uśanti na*—出ない; *anyathā*—他の方法によって。

だから、どうか、あなたが自分のヴェーダの幅広い知識をとおして学んだ全能の主の活動について説明していただきたい。そのことが、すぐれた博識者たちの強い望みを満たし、同時に、物質的苦悩にいつも悩まされている大衆の苦しみをやわらげるからである。まさに、そのような苦境から逃れる方法はほかにはない。

### 要旨解説

シュリー・ナーラダ・ムニは、物質的活動から生じるすべての問題の解決は、至高主の超越的栄光を広く伝えることにある、と自分の体験をとおして断言しています。人類は4段階の善人と悪人に分けることができます。4種類の善人は全能なる神の存在を認めているので、(1)困難に直面しているとき、(2)お金が必要なとき、(3)高い知識を持っているとき、(4)神についてもっと知りたいと思うとき、本能的に主に救いを求めます。そのため、ナーラダジーはヴァーサデーヴァに、すでに得ている幅広いヴェーダ知識にもとづいて神に関する超越的な知識を広めるよう助言しました。

悪人も4種類に分けられます。(1)生活を改善させる果報的活動に明けくれ、結果として伴う苦しみに悩まされている人々。(2)感覚を満たすための背徳行為にふけり、それに伴う苦しみに悩まされている人々。(3)物質的な知識に長じていても、全能の主の権威を認める判断力がないために苦しんでいる人々。(4)いつも苦境にあるのに、無神論であるために神の名前を故意に忌み嫌っている人々。



シュリー・ナーラダジはヴァーサデーヴァに、善悪双方の8種類の人々の幸福のために、主の栄光を説くよう勧めました。ですから、『シュリーマド・バーガヴァタム』は特定の種類の人種や宗派のために用意されているわけではありません。自分自身の幸福や心の平安を心から求めている誠実な人々のためにあるのです。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第5章、「『シュリーマド・バーガヴァタム』についてヴァーサデーヴァに授けられたナーラダの教え」の要旨解説を終了します。